

学生相互間採血における看護学生の 自己制御を測定する質問紙の開発

鈴木 真由美

Development of a Questionnaire to Measure Self-Regulation by Nursing
Students When Practicing the Drawing of Blood

Mayumi SUZUKI

Abstract : [purpose] Self-regulation (Carver & Scheier, 1981) is goal-directed and regulated by feedback control processes. The objectives of this study are development of a questionnaire to measure Self-regulation by nursing students when practicing the drawing of blood.

[method] A pilot study was conducted through semi-structured interviews to make an inductive analysis of Self-regulation triggers:14 items, reference values and current actions:23 items, and influential support for learning:18 items. A provisional questionnaire was developed based on the results of this study. A pre-survey was conducted using the provisional questionnaire and questions were chosen based on analysis to develop a questionnaire for the main survey. The questionnaire consisted of Question :sense of coherence (SOC) of the test battery. SPSS Ver. 19 was used for analysis.

[Result and Discussion] The questionnaire was confirmed to be concurrently valid by multiple regression analysis with SOC. The survey was conducted from August to October, 2011 and 248 answers were obtained (response rate:38.6%). Factor analysis showed that the Self-regulation trigger was related to 3 factors, including "internal pressure from empathy"; that reference values were related to 5 factors, including "having a confident self image of using the needle without hesitation"; that current actions were related to 5 factors, including "using the needle calmly without showing anxiety"; that the influence of tension was related to 3 factors, including "properly timed and worded advice"; and that the influence of anxiety was related to 3 factors, including "encouragement and advice" (factor loading: ≥ 0.30 ; Cronbach's coefficient alpha: ≥ 0.60). To increase Self-regulation, it is necessary that students themselves can set clear reference values and pay attention to and reduce the differences between these values and current actions.

Key words : practicing the drawing of blood (学生相互間採血), self-regulation (自己制御), development of a questionnaire (質問紙の開発)

I. 序 論

看護基礎教育の中核である技術教育は、臨

地実習においてはもちろんのこと、学内の演習においても、人権への配慮や安全性などの倫理的な問題から、学生が行う看護技術の範

困が限られているのが現状である。厚生労働省が示す「卒業時の到達度」¹⁾に準じた看護師養成の教育機関の到達目標は、教育機関により異なってきており、卒業直後の看護師の技術能力にも格差が生じているといわれ続けている²⁾。学内の演習は、看護技術を習得する上で必要不可欠なものであり、学生がお互いに看護師役、患者役を行う体験は、学習の深化が得られる良い機会でもある。特に身体侵襲を伴う看護技術に関しては、「看護教育のあり方に関する懇談会」³⁾でも、効果的・実践的な学習方法の確立を目指すことが論点とされていた。学内では、臨地実習において体験することができない看護技術の強化に関して、何をどの程度習得するのかといった課題がある。特に、採血を代表とする身体侵襲を伴う看護技術は、緊張、不安、恐怖などの感情のコントロールが必要となる看護技術であることから、技術の習得が困難な看護技術といえる⁴⁾⁵⁾。筆者の体験からも学生は、対象に侵襲を与えるという不安などの負と取れる感情（以降、負の感情と記す）や緊張状態をコントロールしなければ、技術の習得が難しいことがうかがえた⁶⁾。学生は、技術の習得が困難である学生相互間採血の演習で、どのようなプロセスで採血の技術を習得しようとしているのか、効果的・実践的な学習方法の確立を目指すためには、このプロセスの解明が必要であると考えた。

自己の到達目標に向かって感情のコントロールをして行動を変えたり、維持したりすることは、心理学で述べる自己制御 (self-regulation, Carver & Scheier) である⁷⁾。看護の初学者である学生は、身体侵襲を伴う看護技術を行う場面では、この自己制御が機能すると考えられる。よって、実際に看護師役、患者役を体験し、人体に針を刺入する学生相互間採血の演習は、学生の感情のコントロールが必要となり、自己制御が機能する演習となる。初めて針を刺す恐怖から、失敗するのではないか、

対象に痛みを与えるのではないかという不安な感情が生じ、その負の感情のコントロールをしながら看護技術という行為、あるいは行動を表現している。怖い、どうしよう、緊張するという自己の感情をそのままに表出する学生もいれば、感情を表出しない学生、あるいは初めての体験への期待と興奮を抑えきれないという学生もいる。

学生相互間採血に関する先行研究では、STAIを用いた質問紙調査などから、学生の抱く感情には不安があることは明らかである⁸⁾。生理心理指標からは、学生の緊張状態も高いことがいえる⁹⁾。しかし、これらの感情が、技術の習得にどのように影響するかについて明確にした研究はなく、学生の心理状態を検討することが課題であるという見解にとどまっている。学生の学びに関する研究では、学生は、不安などの負の感情をもちながらも看護師としての姿勢を学んでいることがわかっている¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。これらの文献は、自己制御の必要性が示唆されている記述はあるが、感情と行動の関連に着眼して述べられてはいない。

以上、学生相互間採血の技術を評価する際には、自らのストレスをどのように乗り越えるのかといった心理的側面を含めた研究が必要となるが、この尺度は見当たらない。よって、本研究の目的は、学生相互間採血における看護学生の自己制御に関する尺度開発として、質問紙を作成することである。身体侵襲を伴う学生相互間採血において、学生の身につけた知識、技術から導かれる行動のプロセスを明らかにすることは、看護基礎教育において看護実践能力の育成に必要な学習支援の示唆が得られると考える。

II. 用語の操作的定義

本研究で用いる用語は、以下のように定義した。

1. 学生相互間採血

学生2人1組で看護師役、患者役の役割を

もち、実際に静脈血採血を行うことをいう。モデル人形やシミュレーターを用いた採血は含まない。シリンジ採血であるか、真空管採血であるかは各教育機関によって異なる。厚生労働省が定義する「学生間採血」、先行研究の「学生同士の採血」と同義語である。

2. 自己制御 (self-regulation)

人は、到達が困難な場面に直面すると、自分はどのように行動できるかを判断する。そしてその判断の結果、決められたゴールに向けて、個々人が設定した行為の基準 (reference value) をもとに行動する。実際の行為 (current action) と行為の基準とを比較しながら、行為の基準と実際の行為とのズレを小さくするように行動する。この過程を自己制御という。

学生相互間採血においては、学生の感情が自己制御の機能のきっかけ (trigger) となる。決められたゴールに到達するために設定した行為の基準と実際の行為のズレを小さくする、あるいは合致させるために、自己の感情のコントロールを行いながら行為の基準に向けての統制をはかると考える。行為の基準と実際

の行為のズレを小さくすることが決められたゴールへの到達につながる。

わが国においては、発達心理学の領域において柏木¹³⁾が、self-regulationを自己制御と紹介しているが、研究の対象は幼児期が主である。本研究の研究対象である看護学生に対して、わが国での研究報告はない。

III. 本研究の概念枠組み

学生相互間採血における自己制御の枠組みを、Carver & Scheier¹⁴⁾の自己制御の理論を参考に作成した (図1)。

学生相互間採血の場面では、看護師役の学生は、たとえば「安全に採血ができる」のような決められたゴールを確認する。そのゴールに向けて、自分はどのように行動すれば採血ができるのかを考える。考えた結果、不安な感情や緊張状態が強ければ、『自己制御のきっかけ』が起り、自己制御の必要性が生じる。決められたゴールに到達するために学生は、一人ひとりの『行為の基準』を設定する。この『行為の基準』と学生が実際行っている『実際

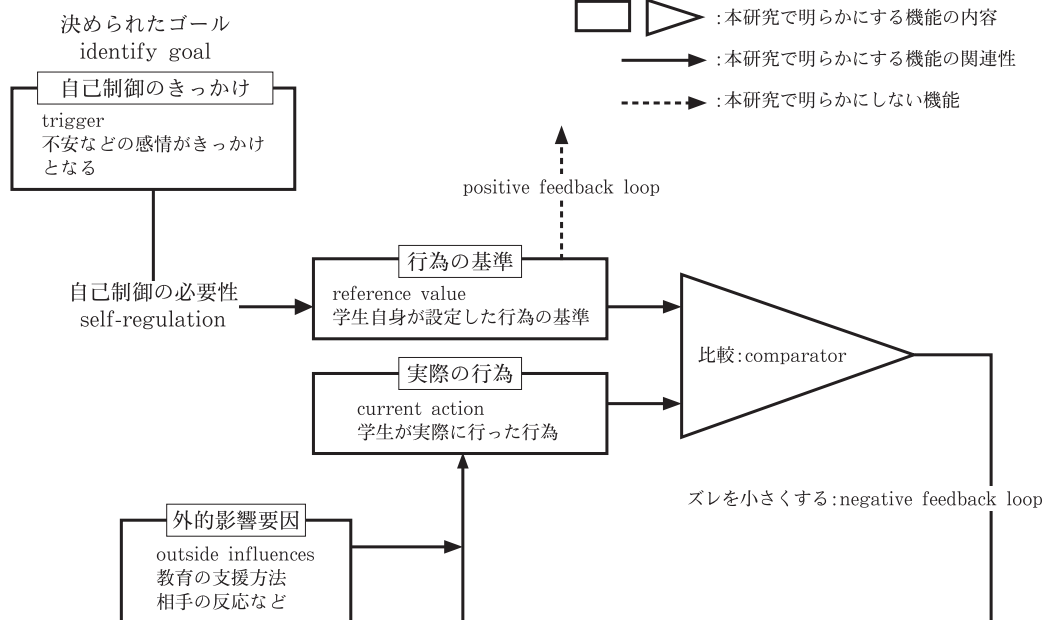


図1 本研究の概念枠組み：自己制御 (self-regulation)
(英語表記は Carver & Scheier: 1990. 2000 の表記, 邦訳は研究者)

の行為』を『比較』しながら、ズレを小さくしようと努力する。『行為の基準』と『実際の行為』の『比較』に注意を向けることで、実際の行為のフィードバックが機能する。この循環過程をネガティブ・フィードバック・ループといい、自己制御の機能そのものを示す。

自己制御は環境に依存はしないが、環境の影響はうける。学生相互問採血の自己制御の影響要因には、教員の学習支援の方法や相手の反応があると考えられる。教員の学習支援の方法については、教員の考える支援が、必ずしも学生のネガティブ・フィードバック・ループに効果的であるとはいえない。教員の

学習支援の方法と学生が望む学習支援が合致すると、ネガティブ・フィードバック・ループにおいてズレを小さくすることができる。

IV. 研究方法

1. 調査のプロセス

学生相互問採血における自己制御についての質問紙の作成のため、以下の手続きを踏んで調査を実施し、質問紙を作成した。

まず、質問項目の抽出のため、半構成的面接法でパイロットスタディを実施した。この結果は、質的帰納的に分析し、学生の自己制御の過程を明らかにした後、暫定的に質問紙

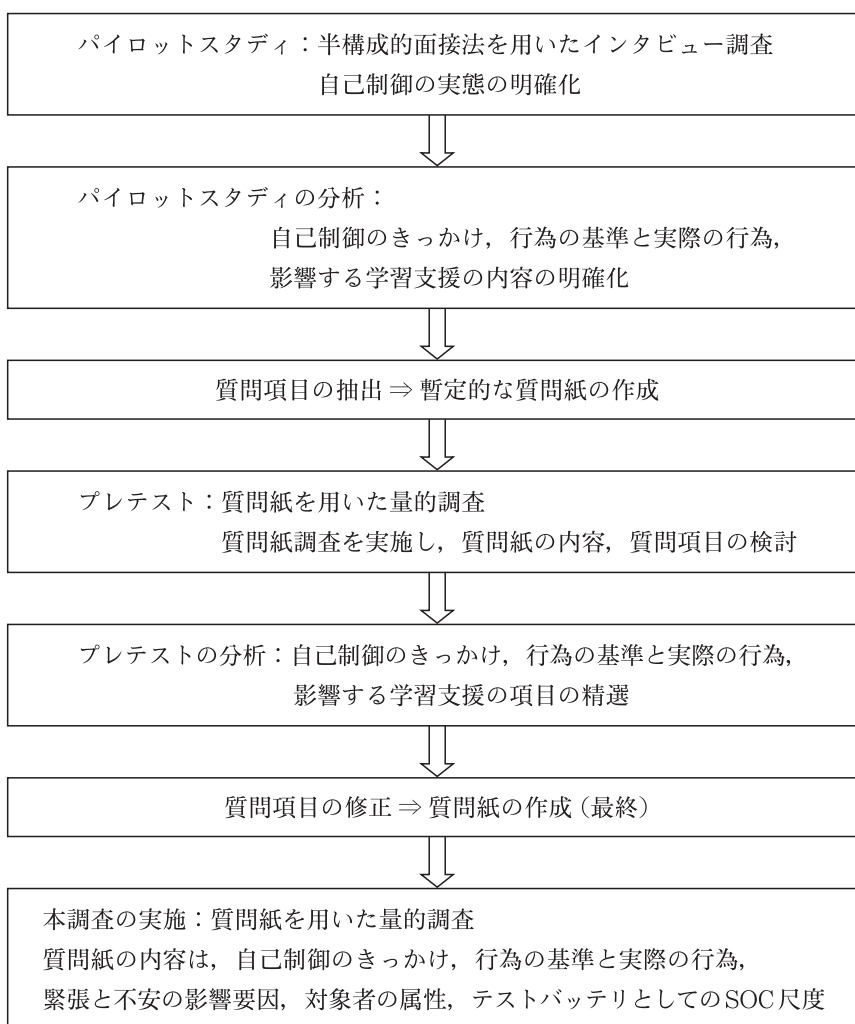


図2 調査のプロセス

を作成した。この暫定的に作成した質問紙の質問項目の精選のため、プレテストを実施した。この結果は、因子分析の後、質問紙の信頼性と妥当性を検討して最終的な質問紙を作成した。

本調査は、上記のプロセスを経て作成した質問紙を用いて実施した。学生の自己制御の機能と過程、影響要因は、質問Ⅰにおいて14項目、質問Ⅱにおいて23項目、質問Ⅲにおいて18項目で尋ね、対象者の属性は質問Ⅳで尋ねた。なお、質問紙は研究者が作成した独自のものであるため、質問Ⅴでは、既存の尺度、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence, 以降、SOCと記す)¹⁵⁾を用いて併存妥当性を確認した。本研究の調査のプロセスを示す(図2)。

2. 質問紙の併存妥当性の確保

質問紙の併存妥当性を確認するために、SOC尺度を採用した理由を以下に述べる。

SOCとは、健康社会学者のAntonovskyにより構築されたストレス対処能力の概念であり、SOCが強い人は、深刻なストレスに遭遇してもむしろそれを成長の糧とし、かつ、よい健康状態を保っていると述べている¹⁶⁾。

このSOCは、Antonovskyが作成したSOC英語版29項目尺度と13項目縮約版尺度によって測定可能とされている。日本語版短縮版尺度は、13項目7件法で構成され、その尺度の信頼性、妥当性が検証されている¹⁷⁾¹⁸⁾。ストレスラーが健康にどのように作用するかは、それがもたらす緊張の処理に成功するか、失敗するかにかかっており、さらに緊張処理の成否は、SOCの強さにかかっているという理論モデルである。

SOCの尺度は、把握可能感 (comprehensibility)、処理可能感 (manageability)、有意味感 (meaningfulness) の3つの因子で構成されているが、この3要素は分けるのではなく、一時限性の尺度で扱われるのが妥当とされている¹⁹⁾。看護学生においても、SOCが強い(得点が高い)人ほどストレスが少なく、

知識・技術や人間関係などの不安をプラスに転化するなど柔軟で積極的なストレス対処の特性が裏づけられている²⁰⁾²¹⁾。SOCが強い人は、外的環境や内的環境への強い信頼や確信、そして強い自己としっかりしたアイデンティティがあり、内的環境への信頼や確信は、肯定的な自己イメージをもたらすと述べている。

よって、不安や緊張が生じる学生相互間採血での緊張処理の成否が、SOCの強さにかかっていることに依拠し、研究者が作成した独自の質問紙の併存妥当性のテストバッテリーとして採用した。

学生相互間採血で生じる不安や緊張を、うまく対処できる傾向にあるのか、それとも回避する傾向にあるのか、SOC日本語版短縮版尺度、13項目7件法を用いて調査した。SOCの3つの因子は、以下のように構成される。

把握可能感：sense of comprehensibility

自分の置かれている、あるいは置かれるであろう状況がある程度予測でき、または理解できるという感覚である。

処理可能感：sense of manageability,

何とかなる、何とかやっていると
いう感覚である。

有意味感：meaningfulness

ストレスラーへの対処を含め、日々の営みにやりがいや生きがいや生きる意味が感じられるという感覚である。

V. 予備調査

1. パイロットスタディ

1) 調査対象

A学の採血の演習において、学生相互間採血を実施した学生に研究協力を依頼した。そのうち、研究協力の得られた12人を対象に、半構成的面接法を用いたインタビュー調査を実施した。

2) 調査期間

調査期間は、平成23年10月～11月とした。

3) 分析方法

録音されたインタビュー内容は、研究者自身で逐語録としてデータ化した。インタビューを実施した12人は、A～Lまでに記号化した。逐語録は、データの意味と理解のため何度も繰り返し読み込み、Carver & Scheier の理論に依拠し、以下の3段階を経て分析した。

- ① 一人ひとりのデータを分析し、何が起きているのかを明確にした後、自己制御の機能の実態を理解した。
- ② データを移動し、現象に関して何が典型的であるか、ある程度一般化した。自己制御が機能していた場面の文脈を抽出した後、文脈の内容からきっかけ、行為の基準と実際の行為、影響する教員の学習支援に分類し、類似と相違に着目し、それぞれカテゴリ生成をした。
- ③ 上記のカテゴリを手掛かりにし、自己制御のきっかけ、行為の基準と実際の行為、影響する教員の学習支援の質問項目を検討し、データを体系的に分類した。これらの分析においては、信頼性を確保するために、質的研究に詳しい研究者2名からスーパーバイズを受けた。

4) 倫理的配慮

研究計画は、飯田女子短期大学の倫理委員会の審査を経て承認を受けた(承認番号H23-3)。研究協力の同意書にサインがもられた協力者に対して、学生相互間採血時の看護師役への気持ち、その時の行動、何を目標としていたか、教員の学習支援についてなどの質問を半構成的面接で行った。面接内容は、対象者の許可を得て録音した。

5) 調査結果

- ① 対象者の概要
パイロットスタディにおいて、対象となった学生12人の概要を表1に示す。
- ② 逐語録の分析結果
逐語録の分析結果を、自己制御のきっかけ(表2)、行為の基準と実際の行為(表3)、影響する教員の学習支援(表4)の分類ごとに述べる。
以下、カテゴリは【 】、サブカテゴリは《 》、対象者の語りは「 」として示し説明する。語りだけでは意味がとらえにくい部分については、前後の文脈からとらえた言葉を()に補足した。語りの最後のアルファベットは対象者を示す。

表1 インタビュー対象者の属性

対象者	学 位	職 歴	初回の演習	2週目の演習	時間(分)
A	准学士	あり	1回で採血できた	2回目で採血できた	31.5
B	准学士	あり(准看護師)	1回で採血できた	1回で採血できた	32.5
C	なし	なし	1回で採血できた	2回目で採血できた	18.5
D	なし	なし	1回で採血できた	2回目で採血できた	20.5
E	なし	なし	1回で採血できた	1回で採血できた	17
F	学 士	あり	1回で採血できた	1回で採血できた	23.5
G	なし	なし	1回で採血できた	1回で採血できた	17
H	なし	なし	1回で採血できた	1回で採血できた	30
I	なし	なし	1回で採血できた	3回目で採血できた	22.5
J	なし	なし	2回目で採血できた	1回で採血できた	31
K	なし	なし	1回で採血できた	3回目で採血できた	20.5
L	なし	なし	1回で採血できた	1回で採血できた	32
平均 SD	学位あり3名	職歴あり3名	1回で採血 11名	1回で採血 7名	24.7 ±7.8

表2 自己制御のきっかけの内容

【カテゴリ, 2】《サブカテゴリ, 7》(コード数, 24)
【相手の不安な感情を考える】(16)
<p>《未熟な技術による失敗で迷惑になることの不安》(6)</p> <p>「自分の技術が足りないがために不安を与えてはいけない, B)」</p> <p>「看護師役が怖がっていたらできるものもできなくなっちゃうって, 刺される患者さんが一番不安なので, C)」</p> <p>「1回教えてもらったし, 失敗したら相手に迷惑かかるじゃないですか, F)」</p> <p>「自分が迷ったりすると相手も怖いし, G)」</p> <p>「(患者の場合) 病気できているのに, そんな注射で不安を与えたくないし, K)」</p> <p>「不安はありました, 失敗したら, 迷惑かけたら悪いなって, まず, 血管がちゃんと探し出せるかってところも, やっぱ初めてなのでわからないし, 見つからないと困るなってところと相手に迷惑かけないかって, L)」</p>
<p>《顔見知りの相手に痛みを与えることの不安》(5)</p> <p>「やっぱ, 針だから, 刺すのが, どうも, その, 注射自体が嫌いな人もいるし, 探ったりとか, そうゆうのがあると痛いんじゃないかなって, H)」</p> <p>「失敗しちゃって, 患者役の子が, 『痛い, やめて』って言ったらどうしようってゆう不安, 実際針を打つのは自分だったのですごい怖かったですね, 自分も不安だけれどやってもら患者さん役の子の方が, 不安だろうな, とは思っていて, その(患者役の子のために失敗しないようにとか, 気を付けようとか, そうゆうことはありましたね, I)」</p> <p>「不安も緊張も同じくらいだったんですけど, 不安の方が, 相手が痛がらないかなあとか, (相手に負担がかかっちゃうってことが) やっぱ悪いかなって, J)」</p> <p>「顔見知りの子だから, この後も授業もあるのに, 痛い思いをさせたらどうしよとか, K)」</p> <p>「1回刺した後に抜けてくると痛いて聞いたので, それがちゃんと押さえられるかなって, (相手への迷惑は) 痛いて思うこと, 相手が不快になったら嫌だなんてのと, なるべく負担をかけたくないって L)」</p>
<p>《相手に危害を与えるかもしれない恐怖》(4)</p> <p>「たとえば変なところに刺しちゃったとか, 痛いて, 血が出てこなかったり, 逆に血がすごい出ちゃったり, 自分が想像できないことが起きたらどうしようって, 血管つきやぶっちゃったらどうしようとか, 初めて人に危害を与えるかもしれない実技ってゆうか, 刺しちゃったら血は出てくるし, そういう意味でほかのとは違うなって思いました, A)」</p> <p>「静脈を傷つけてしまって, もし, しびれとかがひどかったりとかしちゃったら…傷つけたりとかはしちゃいけないと思ったので, D)」</p> <p>「怖かった, そんなに失敗しちゃうんだあ, って, そんな何回も刺してみんな大丈夫かなあって, F)」</p> <p>「相手に危害が加わってはいけないなってゆう緊張, H)」</p>
<p>《相手の緊張で生じることを考えること》(1)</p> <p>「看護師さんが, ちょっと不安そうな顔をしていたら, 患者さんって, 信頼できないし, 手とかも緊張して, 血管も採血しずらくなってしまうし, 看護師もやるなら堂々と, 不安を見せないようにやる必要があるなって思いました, G)」</p>
【困難な技術に対する感情がある】(8)
<p>《針を刺すことへの恐怖》(3)</p> <p>「注射する採血するっていうので, やっぱりなんか固くなっちゃうなあっていうかなんか怖いなあっていう気持ちあった, D)」</p> <p>「人に針を刺すって行為がちょっと怖くて, ずっと緊張していて… I)」</p> <p>「どうしようってゆう不安, 怖かったし, K)」</p>
<p>《困難な技術であることへの不安》(2)</p> <p>「不安はなくなるんですけど, はじめての実技だからかな, 刺すのが…注射って初めてのことだし, 緊</p>

張するし、不安はあるんですけど… A)」

「自分で刺せるのになんて、実際自分が刺すってなると血管探さないといけないし、そんなことが自分でできるのかってゆう不安がありました。H)」

《失敗しないでできるかという不安》(2)

「不安が失敗を呼ぶんじゃないかって思ったので。A)」

「緊張してました。自分でやらなきゃいけないと思って、ちゃんとできるかなとか。失敗しないでできるかなって。E)」

《楽しみであるという思い》(1)

「ちょっと楽しみ。看護師っぽいことをできるのがちょっと楽しみだった。F)」

<自己制御のきっかけ>

得られたデータから、まず、学生相互間採血の演習における自己制御のきっかけを、初回の演習に限定して抽出した。その結果、【相手の不安な感情を考える】と【困難な技術に対する感情がある】の2つのカテゴリに分類された。

【相手の不安な感情を考える】は4つのサブカテゴリで構成された。自分の技術が未熟であり、失敗する可能性が高いため相手に不安にさせたり、相手に迷惑をかけるなど、相手に及ぼす影響を考える《未熟な技術による失敗で迷惑になることへの不安》、採血する相手は同じクラスの友達であり、演習以外の場面での関係性を考える《顔見知りの相手に痛みを与えることへの不安》、針を刺すことで血管を傷つけてしまうのではないかと考える《相手に危害を与えるかもしれない恐怖》、相手の緊張が自分の技術に影響することを考える《相手の緊張で生じることを考えること》という対象に及ぼす影響から生じる自己の感情が語られた。

【困難な技術に対する感情がある】は4つのサブカテゴリで構成された。初めて人体に針を刺すことを考える《針を刺すことへの恐怖》、人体に針を刺すことが困難な技術であることを考える《困難な技術であることへの不安》、失敗することを考える《失敗しないでできるかという不安》、一方で、針を刺すことに《楽しみであるという思い》という自己の感情が語られた。【困難な技術に対する

感情がある】の《楽しみであるという思い》の1データ以外は、看護師役として初めて採血をすることでの失敗に対する不安、恐怖の感情、その感情が引き起こす緊張状態であった。

2つのカテゴリは、ともに自己の持つ感情が自己制御のきっかけとなっていた。

<行為の基準と実際の行為>

次に、学生相互間採血の演習における行為の基準と実際の行為を抽出した。その結果、【血管を保護し出血させない】【感情のコントロールをする】【物品を整える】の3つのカテゴリに分類された。

【血管を保護し出血させない】は4つのサブカテゴリで構成された。《痛い思いをさせないように1回で採血する》《角度に気を付けて血管を外さないように穿刺する》という血管に刺入することに関する語りと、《駆血帯を外す順番に気を付ける》《針が抜けないように固定をしっかりする》という出血させないことが語られた。

【感情のコントロールをする】は3つのサブカテゴリで構成された。自分がためらうことで相手が不安になるため《ためらわずに穿刺する》、怖いと思ったり慌てたりすると《成功するイメージで手順通りに行く》ことができないために《落ち着いて冷静に、怖いと思わず不安を見せないように行く》という血管に刺入する場面でのどのように感情をコントロールするかという内容が語られた。

【物品を整える】は、物品がそろっていないことで慌てて失敗することの回避のため《物品

表3 行為の基準と実際の行為の内容

<p>【カテゴリ, 3】 《サブカテゴリ, 9》 (コード数, 28)</p>
<p>【血管を保護し出血させない】 (14)</p> <p>《痛い思いをさせないように1回で採血する》 (6)</p> <p>「すぐには採れなかったというか, それを失敗というのか, 私の中では失敗したなという思いがあって, B)」</p> <p>「1回で採りたかったんですよ, 何回も刺したくなかったので, C)」</p> <p>「採れたから良かったーしか思っていない, E)」</p> <p>「自分の目標で採血するってゆう目標がちゃんとあったので, I)」</p> <p>「部位のことは気をつけようと思いましたし, 部位を決めて一回で出来ればいいんですけど, 部位を間違ったりして, 負担もかかっちゃうので, 何回も痛い思いをさせちゃあいけないってのが一番ありました, 自分自身もちゃんとしなきゃいけないって… J)」</p> <p>「注射する時のことばかりを考えていて, 相手の子の腕に青くなっちゃったり, 失敗して痛くなっちゃったりしたら, K)」</p>
<p>《角度に気を付けて血管を外さないように穿刺する》 (5)</p> <p>「刺す場所, 角度, 血管に刺したいってのがあった, C)」</p> <p>「刺入の角度, しびれを聞く, D)」</p> <p>「手順を間違えたり, 血管にうてなかつたりっていう, (ことをしない) E)」</p> <p>「ちょっと高い目標を持ってやるのを心掛けて, こう(ジェスチャー)血管に針を刺す, F)」</p> <p>「刺す時に, 相手にこれから刺すよって時間をあんまりもたせると緊張するなって思ったので, (血管を)見つけたら早い方がいいかなって思ったので, 失敗するよりかはちょっと時間かけても, 失敗しないほうをやれば重視して, (失敗は)血管じゃあないところに刺してしまうこと L)」</p>
<p>《駆血帯を外す順番に気を付ける》 (2)</p> <p>「楽にしてもらってから駆血帯を外す, D)」</p> <p>「採血の時はやっぱり駆血帯をはずしたりとか, 順番を動かせないのもあるので, そうゆうのを覚えなきゃなってもあって, L)」</p>
<p>《針が抜けないように固定をしっかりする》 (1)</p> <p>「1回刺した後には抜けてくると痛いて聞いたので, それがちゃんと押さえられるかなって…略…相手に迷惑かけないかって, L)」</p>
<p>【感情のコントロールをする】 (11)</p> <p>《ためらわずに穿刺する》 (5)</p> <p>「迷っていたり, 躊躇した方が痛いていうのは聞いてたので, これは思い切ってやるしかないって思っで気合入れて, D)」</p> <p>「ためらうと痛いから思い切ってやらないと思ったんだけど, F)」</p> <p>「やるって決めたらぶすっと, ぶすっと行こうと思って, 迷ったり, 間違ったりしても, やばいとか言わないようにして, 平常心を装うとか表情には出さないようにしました, G)」</p> <p>「できなかったらどうしようってゆう思いの迷いがあると, なんか患者役の子にも不安にさせちゃったりとか, I)」</p> <p>「刺す時に, 相手にこれから刺すよって時間をあんまりもたせると緊張するなって思ったので, 見つけたら早い方がいいかなって思ったので, L)」</p>
<p>《落ち着いて冷静に, 怖いと思わず不安を見せないように行う》 (4)</p> <p>「おたおたしている姿を患者さんに見せたくないと思うから, B)」</p> <p>「思いすぎるとなんかそういう行動になっちゃうなって思ったので, なるべく無心でいようと思って, あんま考えないように, なるべく冷静になるように心掛けました, すごい怖かったので, だから逆に冷静になっっていうのを思いました, 慌てたままだと, 余計手震えてなんか変なとこ刺しちゃったりとか, いろいろなことする, 慌てたりすると, とんだりとかすごいあるのでそういうのダメだなんて思ったので, D)」</p>

「はじめてだったから失敗してもしょがない位な気持ちでいかないとみたいな気持ちだったんだけど F)」
「(できるって自分に言い聞かせると) 思い込むだけかもしれないけど、気持ち的には楽になるかもしれません。K)」

《成功するイメージで手順通りに行く》(2)

「自分ができるとゆうイメージだけを考えていました。できないことを考えない。できること、うまくいくことを考えた。針を刺している自分を思い浮かべて。さっとできる自分を思い浮かべて。悪いイメージを考えないようにすると、自分がさうゆう風に流れていかない気がして。思い切ってやろうって。おじけづかないように。大丈夫、できる、できるみたいな自分に言い聞かせて。F)」

「とりあえず手順を頭に入れて。E)」

【物品を整える】(3)

《物品を忘れないように用意する》(2)

「物品が全部ちゃんとそろっているか、というのがまず、心配だった。今ほしいのにならなったら焦ちゃって、人に刺しているのに、どきどきしちゃって、失敗の素になるかなって。A)」

「どうゆう風に置いたらに効率がいいかなとか、手順を思い出したりとか、自分がやるときにスムーズにできるように考えていた。患者さん(患者役の学生)のところに行って、ここに何を置いて、こうゆう手順でやっていくってのを頭の中でイメージして… G)」

《物品の配置に気を付ける》(1)

「トレイを、私左利きなんですけど、置く場所がちょっと逆になっちゃって…略…それもいつも考えなきゃあいけないと思うんです。H)」

を忘れないように用意する》こと、さらに自分の利き手に合わせて《物品の配置に気を付ける》ことで構成された。

学生は、前述の初めて採血をすることでの失敗を引き起こさないように、【血管を保護し出血させない】【感情のコントロールをする】【物品を整える】という行為の基準を設定していた。特に【血管を保護し出血させない】こと【感情のコントロールをする】ことを目標として挙げていた。

<影響する教員の学習支援>

最後に、学生相互間採血の演習における影響する教員の学習支援を抽出した。影響要因を網羅できるように、初回の演習、2週目の演習の双方から抽出した。その結果、【安心感を与えてくれる】と【自分が集中している時に助言がある】に分類された。

【安心感を与えてくれる】は4つのサブカテゴリで構成された。できたことを認める、最初からうまくはいかないことを伝えるなど《言葉をかけてくれる》、すぐに対応できるように《最後までそばにいる》、思い切って

行えるように《後押ししてくれる》、不安である場合は《確認を一緒にしてくれる》という学習支援は、学生の実際の行為を支援する内容として語られた。

【自分が集中しているときに助言がある】では、教員の助言の内容が、学生の設定した行為の基準と相違が生じた様子がうかがえた。この相違が、実際の行為に影響すると考えられる。この点に関しては、効果的な学習支援とはどのような支援であるのか、明確となるような質問項目の検討が必要となった。

6) 質問項目の抽出

以上、逐語録のデータをカテゴリ生成した後、自己制御のきっかけ、行為の基準と実際の行為、影響する教員の学習支援を質問項目に起こした(表5, 表6, 表7)。

質問項目の抽出は、《サブカテゴリ》レベルでの抽出を基本とした。一つの《サブカテゴリ》でいくつかの意味を含むものは、先行研究^{22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30)}で述べられている学生の感情、学び、困難とすることを参考に、さらに詳細な質問項目に起こした。

表4 影響する学習支援の内容

<p>【カテゴリ, 2】《サブカテゴリ, 4》(コード数, 14)</p> <p>【安心感を与えてくれる】(12)</p> <p>《言葉をかけてくれる》(5)</p> <p>「出来たことをほめるじゃないけど、言葉で表現して言ってくれたし安心もしたし、出来たんだなってゆう実感… G)」</p> <p>「冗談も言ってくれて気持ちが落ち着いたかなってのはあります. H)」</p> <p>「すごいフランクな感じだったし.『できるわけないんだから』みたいな.『最初からできるわけないんだから』みたいな. F)」</p> <p>「最初からはうまくいかないよってゆう空気を先生が出してくれたのでその辺はよかった. L)」</p> <p>「『大丈夫だよ、私(教員)のは見えやすいから』って言ってくれて(初回演習の2回目採血時) J)」</p>
<p>《確認を一緒にしてくれる》(3)</p> <p>「先生に確認して、『この角度ですよね、こうですよね』みたいな感じで.『もうちょっとすすめて』『よし、先生に確認採れた』ってのはありました.安心感がありました.私の判断だけでなく、ちゃんと先生の助言、判断で進めている.「よし、OKみたいな」安心感もって臨めました. A)」</p> <p>「刺すのをためらっていると、じゃあもう一回確認しようかとか、確認してまた消毒して. I)」</p> <p>「まず血管を見極める時に、自分じゃどれがいいのかわかんなくて、ここなら大丈夫って言ってもらえたので、それを目安にここしかないみたいに刺すことは大事ななって思います. H)」</p>
<p>《最後までそばにいる》(2)</p> <p>「何かあった時は一人じゃないって…とりあえず安心.(何かあった時は)病院にすぐに、とかいう対応ってどうしても自分一人だと慌てちゃうけど… D)」</p> <p>「見守ってくれたので、それだけで十分安心.わからなかったらすぐに聞ける状況だったので. E)」</p>
<p>《後押ししてくれる》(2)</p> <p>「『順番なんて別にいいから、流れていいよ』って言ってくれたので. D)」</p> <p>「学生に頑張してほしいという思いに、自分やらなきゃあって、駆り立てられました. C)」</p>
<p>【自分が集中しているときに助言がある】(2) *サブカテゴリは生成されなかった</p> <p>「その時(2週目の演習)は最初からスイッチが入っていて、だから『手順が違う』って言われた時…『えっ?何がダメなんですか?』って. B)」</p> <p>「針をそのまますすめたんです.それをそのまま抑えられてやってるんだけど、こっちがやめてくださいって感じで、もう患者役の子がもうだいふ痛い顔してたので、もういいです.いいですってかんじだったんだけど…1回目は(手を)添えてくれたのに2回目はもう全て自分でってなるとやっぱり不安が余計大きくなるので、1回目も怖いけど見守ってもらってるだけのほうがいいのか. D)(2週目の演習で)」</p>

表3で示した行為の基準と実際の行為の質問項目は同一のものとして、行為の基準の重みづけは「思っていた」、実際の行為の重みづけは「できた」とした。

2. プレテスト

1) 調査対象

A学の採血の演習において、学生相互間採血を実施した60人の学生に研究協力を依頼し、パイロットスタディの結果から抽出した質問項目で構成された自記式質問紙調査を実施し

た。そのうち、研究協力の得られた45人(回収率、71%)を調査対象とした。

2) 調査期間

調査は、平成24年6月に留め置き法で行った。回収ボックスへの投函は、質問紙の配布から2週間以内とした。

3) 分析方法

分析には、統計ソフトSPSS19.0J for Windowsを用い因子分析を行った。学生の自己制御のきっかけである質問Iの12項目、行為

表5 自己制御のきっかけと質問項目の抽出

きっかけのカテゴリ サブカテゴリ(コード数)	プレテストの質問項目 全12項目
相手の不安な感情を考える(16)	
未熟な技術による失敗で迷惑になること の不安(6)	失敗したら相手に迷惑になる
顔見知りの相手に痛みを与えること の不安(5)	相手に痛い思いをさせる/相手を不安にさせる, 相手が痛くないようにしよう/相手を不安にさせてはいけない
相手に危害を与えるかもしれない恐怖(4)	相手に危害を与えるかもしれない
相手の緊張で生じることを考えること(1)	友達だから緊張する 相手を緊張させないようにしよう
困難な技術に対する感情がある(8)	
針を刺すことへの恐怖(3)	針を刺すことが怖い
困難な技術であることへの不安(2)	難しい技術だ
失敗しないでできるかという不安(2)	失敗したくない
楽しみであるという思い(1)	針を刺すことが不安だ

表6 行為の基準と実際の行為の質問項目の抽出

行為の基準のカテゴリ サブカテゴリコード(コード数)	プレテストの質問項目 全20項目
血管を保護し出血させない(14)	
痛い思いをさせないように1回で採血する(6)	痛い思いをさせないようにする/1回で採血する とにかく採血ができる
角度に気を付けて血管を外さないように 穿刺する(5)	穿刺する角度に気を付けて血管に穿刺する 血管を外さないように穿刺する <u>採血針の挿入の長さに気を付けて針を進める</u> <u>血管に空気を入れないようにする</u>
駆血帯を外す順番に気を付ける(2)	針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れないようにする 手を楽にしてもらってから駆血帯を外すようにする <u>抜針の後はマッサージしないようにする</u> <u>抜針の後は圧迫して止血する</u>
針が抜けないように固定をしっかりと する(1)	針が抜けないように固定をしっかりと する
感情のコントロールをする(12)	
ためらわずに穿刺する(5)	ためらわずに穿刺する/不安を見せないように 行う
落ち着いて冷静に、怖いと思わず不安 を見せないように行う(4)	落ち着いて冷静に行う 怖いと思わないで行う
成功するイメージで手順通りに行う(3)	成功するイメージで行う
物品を整える(3)	
物品を忘れないように用意する(2)	必要物品を忘れないように用意する
物品の配置に気を付ける(1)	物品の配置に気を付ける <u>針刺し事故をしないように片付ける</u>

* 下線は先行研究からの追加を示す

表7 影響する学習支援と質問項目の抽出

学習支援のカテゴリ サブカテゴリ (コード数)	プレテストの質問項目 全 12項目
安心感を与えてくれる (12)	
言葉をかけてくれる (5)	教員に何も言われないでじっと見られた/教員が緊張をほぐす雰囲気にしてくれた
確認を一緒にしてくれる (3)	教員が行為の確認を一緒に行ってくれた/教員が血管を一緒に確認してくれた/教員が手をとって一緒にやってくれた
最後までそばにいる (2)	教員が最初から最後までついていてくれた
後押ししてくれる (2)	教員が後押しをする言葉をかけてくれた
自分が集中している時に助言がある (2)	自分が集中している時に教員が助言をくれた/助言がほしい時のみ、教員が助言をくれた/教員にプレッシャーをかけられた <u>教員が終始、真剣な表情をしていた/教員が終始、笑顔を見せていた</u>

* 下線は先行研究からの追加を示す

の基準と実際の行為である質問Ⅱの20項目、自己制御に影響する教員の学習支援である質問Ⅲの12項目に対して、回答の得られなかった項目は欠損値として扱い、それぞれ主因子法、斜交回転による因子分析を行った。因子分析の結果は、固有値の変化、スクリープロットの傾き、因子負荷量（以降、負荷量）から因子の解釈可能性が担保されるかを考慮し、構成が得られるか否かを検討した。負荷量が.30以上に満たない項目、2因子にまたがって.30以上の負荷量を示す項目は質問の内容、表記について質問項目の検討を行った。クロンバックの α 係数（以降、 α 係数と記す）を算出し.60以上を基準値として内的整合性を検討した。解釈の際の数値は、小数点第3位を四捨五入して小数点第2位までとした。割合を示す%の数値は、小数点第1位を四捨五入して実数値に表記した。

4) 倫理的配慮

研究計画は、長野県看護大学倫理委員会の審査を経て承認を受けた（承認番号2012-03）。研究協力依頼書に、研究目的、研究協力の自由を説明し、調査協力を辞退しても構わないこと、それによってならん不利益を生じることがないことの明示をし、研究者名、責任の

所在を明記し、倫理的配慮を行い質問紙の投函をもって同意を得た。

5) 質問項目の精選

以下、分析結果に基づいて質問Ⅰ、質問Ⅱ、質問Ⅲの質問項目の精選をした。

<自己制御のきっかけ>

自己制御のきっかけの因子分析結果からは、3因子が妥当であると考えた（表8）（図3）。項目8「相手が痛くないようにしましょう」の負荷量は、第Ⅰ因子と第Ⅱ因子、それぞれ.47と.43であり近値を示していた。よって、「相手が痛くないようにしましょう」について、他にどのように表現されるかを検討した。検討の結果、質問項目に「失敗ないようにしよう」を追加し、これを逆転項目「失敗しても仕方がない」とした。

第Ⅲ因子の α 係数は.32と低く、項目を削除した場合の α 係数が全項目の α 係数より高い値であったため、質問項目の検討を行った。項目1「難しい技術だ」は、質問項目としては内容が大きいと判断し、感情を含めた自己制御のきっかけ「うまくできるか不安だ」に修正した。項目6「友達だから緊張する」は、プレテストの結果を踏まえ採用した。

他、先行研究より「相手に気を遣わせる」、

表8 きっかけの因子分析(プレテスト)

	I	II	III	α 係数
第 I 因子				
12. 相手を緊張させないようにしよう	.978	-.272	-.072	
11. 相手を不安にさせてはいけない	.871	-.228	-.026	
10. 相手に危害を与えるかもしれない	.694	.081	.121	
9. 失敗したくない	.558	.134	-.244	
7. 相手を不安にさせる	.515	.146	.387	
8. 相手が痛くないようにしよう	.474	.431	-.068	.845
第 II 因子				
3. 針を刺すことが不安だ	-.199	1.041	-.020	
2. 針を刺すことが怖い	-.217	.900	.001	
4. 相手に痛い思いをさせる	.100	.683	.103	
5. 失敗したら相手に迷惑になる	.428	.486	.130	.853
第 III 因子				
1. 難しい技術だ	.383	.256	-.572	
6. 友達だから緊張する	.000	.251	.539	-.322
全項目の Cronbach の α 係数				.853
固有値	5.174	2.085	1.235	
因子相関数				
	I	II	III	
	II	.505		
	III	.084	.211	

(斜交回転による因子分析)

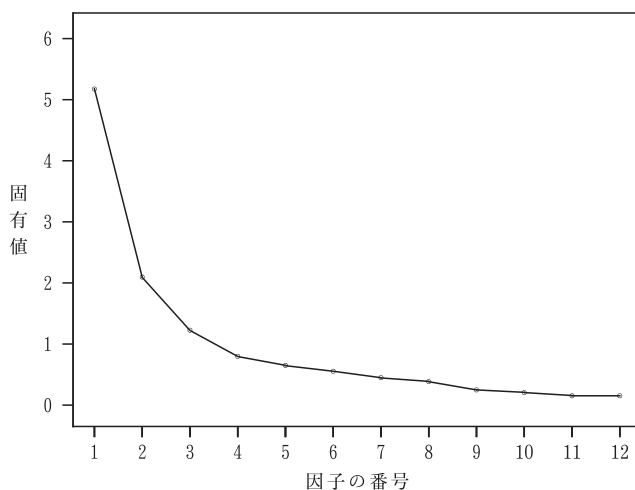


図3 表8の因子分析のスクリープロット(プレテスト)

パイロットスタディより「針を刺すことが楽しみだ」の2項目を追加した。自己制御のきっかけである質問Iは、12項目から14項目に追加・修正した(表9)。

<行為の基準と実際の行為>

行為の基準と実際の行為の質問項目は、行

為の基準の重みづけを「思っていた」、実際の行為の重みづけを「できた」にして、行為の基準と実際の行為で同一の質問項目を20項目に構成して回答を得た。その結果、行為の基準は6因子が妥当であると考えた(表10)(図4)。信頼性の検討のための α 係数は、行

表9 きっかけの質問項目の決定 (質問 I)

プレテストの質問 I の質問項目 12項目	本調査の質問 I の質問項目 14項目
1. 難しい技術だ	1. うまくできるか不安だ
2. 針を刺すことが怖い	2. 針を刺すことが怖い
3. 針を刺すことが不安だ	3. 針を刺すことに不安はない (R)
4. 相手に痛い思いをさせる	4. 相手に痛い思いをさせる
5. 失敗したら相手に迷惑になる	5. 失敗したら相手に迷惑になる
6. 友達だから緊張する	6. 相手を不安にさせる
7. 相手を不安にさせる	7. 相手に気を遣わせる
8. 相手が痛くないようにしよう	8. 失敗しても仕方がない (R)
9. 失敗したくない	9. 相手に危害を与えるかもしれない
10. 相手に危害を与えるかもしれない	10. 相手を不安にさせてはいけない
11. 相手を不安にさせてはいけない	11. 相手を緊張させてはいけない
12. 相手を緊張させないようにしよう	12. 針を刺すことが楽しみだ (R)
	13. 相手が痛くないようにしよう
	14. 友達だから緊張する

* (R) は逆転項目を示す

為の基準は .88, 実際の行為 .79 の内的整合性が得られた。行為の基準の第 IV 因子の項目 2 「物品の配置に気を付ける」の負荷量は .38 と基準の .30 以上を示したが、本調査では、滅菌操作という意味での配置と、穿刺後の抜針がスムーズにできる配置とに区分した。よって「滅菌操作に気を付けて物品を用意する」と「後で慌てないように、物品の配置をする」を追加・修正した。第 VI 因子は、項目 15 「とにかく採血ができる」の一項目で構成され、項目が削除された場合の α 係数は .89 と全項目の α 係数を .01 上回った。説明された分散の合計では、第 VI 因子までの固有値の大きさが 1.0 以上であること、スクリープロットの傾きでは、第 VII 因子以降はほぼ直線的に固有値の値が小さくなっていくことから、「とにかく血液が採れればよい」という質問内容の修正にとどまった。

実際の行為は、6 因子が妥当であると考えた (表 11) (図 5)。項目 14 「針刺し事故をしないように片付ける」と項目 10 「痛い思いをさせないようにする」の負荷量は .40 以上を示しており因子として成立するが、一項目のみの構成であった。項目が削除された場合の α

係数は、項目 14 は全項目の α 係数と同じ値を示し、項目 10 は .01 の差があった。検討した結果、項目 10 の表現を逆転項目に修正し「相手が痛いのは仕方ない」とした。

行為の基準と実際の行為である質問 II は、当初の 20 項目から、項目 2 「物品の配置に気を付ける」を、「滅菌操作に気を付けて物品を用意する」と「後で慌てないように、物品の配置をする」の 2 つに分けたこと、先行研究より「固定をして針が抜けないようにする」「患者役にちゃんと説明する」の 2 項目を追加したことで、20 項目から 23 項目とした (表 12)。

< 緊張と不安の影響要因 >

緊張と不安の影響要因の因子分析は、3 個の因子の抽出が試みられたが、反復 25 で変数の共通性が 1.0 を超え構成は得られなかった。よって、パイロットスタディの結果の、影響する学習支援の内容の素データ (表 4) を参考に検討した。検討の結果、影響する対象の反応として、「患者役が友達だった」「患者役が痛いと言った」「患者役が不安そうだった」の 3 項目を追加した。さらに、項目 1 「教員に何も言われないでじっと見られた」は「教員がみているだけだった」と「教員が何も言

表10 行為の基準の因子分析（プレテスト）

	I	II	III	IV	V	VI	α 係数
第I因子							
11. 1回で採血する	-.909	-.257	.131	-.127	-.029	.155	
14. 針刺し事故をしないように片付ける	.737	.071	-.064	.231	-.190	-.186	
6. 血管に空気を入れないようにする	.667	.040	.114	-.024	.007	-.078	
7. 針が抜けないように固定をしっかりする	.622	.049	.006	-.035	.089	-.119	
5. 採血針の挿入の長さに気を付けて針を進める	.612	.200	-.007	-.075	.271	.054	
10. 痛い思いをさせないようにする	.521	.139	-.012	.002	-.101	.479	.830
第II因子							
20. 怖いと思わないで行う	-.151	.775	-.153	.079	-.140	.231	
19. ためらわずに穿刺する	.183	.712	-.071	-.007	.094	-.148	
17. 落ち着いて冷静に行う	.144	.524	.227	.000	.052	-.277	
18. 成功するイメージで行う	.482	.500	-.049	-.124	-.064	.110	
16. 不安を見せないように行う	.040	.455	.391	.105	.012	.219	.809
第III因子							
9. 手を楽にしてもらってから駆血帯を外すようにする	-.056	.039	.901	-.011	-.019	-.106	
8. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れないようにする	.208	-.200	.779	.040	.046	.022	.821
第IV因子							
13. 抜針の後は圧迫して止血する	-.270	.171	.111	.861	.031	-.028	
1. 必要物品を忘れないように用意する	.472	-.142	-.165	.650	.036	-.112	
12. 抜針の後はマッサージしないようにする	.004	-.121	.337	.539	-.076	.177	
2. 物品の配置に気を付ける	.265	.206	-.162	.380	.116	.057	.741
第V因子							
4. 血管を外さないように穿刺する	-.040	-.108	-.024	.067	1.037	.133	
3. 穿刺する角度に気を付けて血管に穿刺する	.066	.028	.043	-.027	.520	-.097	.650
15. とにかく採血がきる	-.093	.059	-.034	-.019	.060	.981	
全項目のCronbachの α 係数							.877
固有値	6.866	2.423	1.815	1.543	1.189	1.068	
因子関数	I	II	III	IV	V	VI	
	I	.604					
	II	.291	.220				
	III	.376	.426	.331			
	IV	.383	.270	.065	-.086		
	V	.058	.049	.263	.143	-.016	

(斜交回転による因子分析)

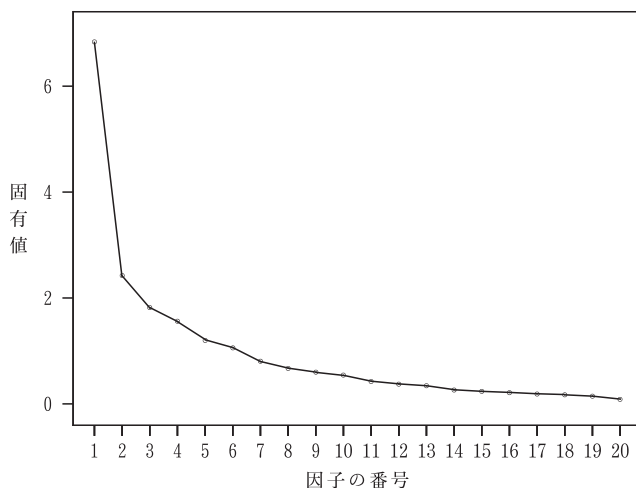


図4 表10の因子分析のスクリープロット（プレテスト）

表11 実際の行為の因子分析(プレテスト)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	α 係数
第I因子								
4. 血管を外さないように穿刺する	.954	-.143	-.068	-.062	-.019	.194	.154	
11. 1回で採血する	.711	.158	-.050	.124	-.317	-.271	.040	
3. 穿刺する角度に気を付けて血管に穿刺する	.689	.100	-.118	.026	-.179	-.027	.080	
5. 採血針の挿入の長さに気を付けて針を進める	.661	-.039	.171	-.050	.348	-.209	-.091	
7. 針が抜けないように固定をしっかりする	.567	.058	-.059	-.023	-.019	.377	-.087	
6. 血管に空気を入れないようにする	.564	-.053	-.099	.015	.345	.104	.108	
15. とにかく採血ができる	.484	-.090	.311	-.156	.121	-.183	.190	.810
第II因子								
16. 不安を見せないように行う	-.261	.850	.143	-.074	.068	.073	.397	
2. 物品の配置に気を付ける	-.047	.691	-.340	-.194	.204	-.040	-.206	
17. 落ち着いて冷静に行う	.196	.652	.043	.239	-.222	-.011	-.003	
18. 成功するイメージで行う	.235	.472	.257	.015	.072	.127	-.225	.810
第III因子								
20. 怖いと思わないで行う	-.174	-.065	1.031	.028	-.065	-.018	-.063	
19. ためらわずに穿刺する	.216	.064	.550	-.037	-.008	.196	-.114	.743
第IV因子								
12. 抜針の後はマッサージしないようにする	-.087	-.040	.043	.799	.182	-.015	-.099	
13. 抜針の後は圧迫して止血する	.039	.016	-.037	.662	.339	.005	.037	.756
第V因子								
9. 手を楽にしてもらってから駆血帯を外すようにする	.047	.062	-.073	.379	.755	.059	.151	
1. 必要物品を忘れないように用意する	.027	.411	-.008	-.008	.529	-.137	-.116	
8. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れないようにする	-.098	-.109	.007	.202	.459	.009	-.098	.754
14. 針刺し事故をしないように片付ける	.033	.018	.052	.002	-.008	.853	.003	
10. 痛い思いをさせないようにする	.240	-.001	-.114	-.046	-.036	-.010	.646	
全項目のCronbachの α 係数								.789
固有値	4.699	3.198	1.861	1.532	1.342	1.167	1.095	
因子係数	I	II	III	IV	V	VI	VII	
	II	.194						
	III	.352	.271					
	IV	-.125	.199	-.050				
	V	.207	.186	.162	.045			
	VI	-.052	.261	.035	.232	.306		
	VII	-.198	-.009	.131	.053	-.148	-.099	

(斜交回転による因子分析)

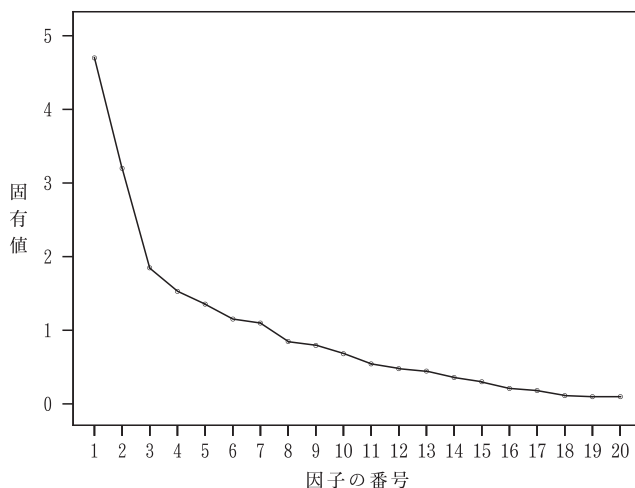


図5 表11の因子分析のスクリープロット(プレテスト)

表12 行為の基準と実際の行為の質問項目の決定（質問Ⅱ）

プレテストの質問Ⅱの質問項目 12項目	本調査の質問Ⅱの質問項目 14項目
1. 必要物品を忘れないように用意する	1. 必要物品を忘れないように用意する
2. 物品の配置に気を付ける	2. 滅菌操作に気を付けて物品を用意する
3. 穿刺する角度に気を付けて血管に穿刺する	3. 角度に気を付けて血管に針を刺す
4. 血管を外さないように穿刺する	4. 血管を外さないように刺す
5. 採血針の挿入の長さに気を付けて針を進める	5. 針を進める時、長さに気をつける
6. 血管に空気を入れないようにする	6. 血管に空気を入れないようにする
7. 針が抜けないように固定をしっかりする	7. 固定をして針が抜けないようにする
8. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れないようにする	8. 駆血帯を巻いたら素早く針を刺す
9. 手を楽にしてもらってから駆血帯を外すようにする	9. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れない
10. 痛い思いをさせないようにする	10. 手を楽にしてもらってから駆血帯を外す
11. 1回で採血する	11. 後で慌てないように、物品の配置をする
12. 抜針の後はマッサージしないようにする	12. 相手が痛いのは仕方がない(R)
13. 抜針の後は圧迫して止血する	13. 1回で採れなくてもよい(R)
14. 針刺し事故をしないように片付ける	14. 針を抜いた後はマッサージしないようにする
15. とにかく採血ができる	15. 針を抜いた後はその場所をしっかりおさえる
16. 不安を見せないように行う	16. 針刺し事故をしないように片付ける
17. 落ち着いて冷静に行く	17. とにかく血液が採ればよい(R)
18. 成功するイメージで行う	18. 不安を見せないように行う
19. ためらわずに穿刺する	19. 落ち着いて冷静に行く
20. 怖いと思わないで行う	20. 成功するイメージで行う
	21. ためらわずに針を刺す
	22. 怖いと思わないで行う
	23. 患者役にちゃんと説明する

* (R) は逆転項目を示す

わなかった」の2つに分け、項目11「教員が終始、真剣な表情をしていた」は「教員が終始真剣な表情をしていた」と「教員が、いざというとき真剣な表情をしていた」の2つに分けた。緊張と不安の影響要因である質問Ⅲは、12項目から18項目とし、「教員にプレッシャーをかけられた」の欄には自由記述欄を設定した(表13)。

VI. 本調査

1. 調査対象

A県内、およびA県に隣接する県内の看護師養成の教育機関(准看護学校、2年課程を除く。以降、教育機関と記す)のうち、採血の演習で学生相互間採血を実施している9機関のうち、承諾の得られた7機関の看護学生

642人とした。そのうち回答が得られた248人(回収率、38.6%)を調査の対象とした。准看護師経験がある学生は、質問紙の場面設定「はじめての採血」に該当しないため本調査では除外した。よって、247のケースを分析の対象とした。表14に対象者の概要を示す。

2. 調査期間

質問紙の配布と回収は、平成24年8月～10月にかけて行い、11月9日までに研究者の手元に届いた質問紙を有効とした。

3. 質問紙の構成と分析方法

予備調査であるパイロットスタディ、プレテストの成果から、質問紙の内容の構成を図6のように決定した。質問Ⅰ、質問Ⅱ、質問Ⅲは、はじめての看護師役の時の気持ち、あるいは行動について、どの程度当てはまるか

表13 影響要因の質問項目の決定 (質問Ⅲ)

プレテストの質問Ⅲの質問項目 12項目	本調査の質問Ⅲの質問項目 18項目
1. 教員に何も言われなくてじっと見られた	1. 教員が見ているだけだった
2. 教員が最初から最後までついていてくれた	2. 教員が最後まで側についていてくれた
3. 助言がほしい時のみ、教員が助言をくれた	3. 教員が助言をくれた
4. 教員が行為の確認を一緒に行ってくれた	4. 教員が血管を一緒に確認してくれた
5. 教員が血管を一緒に確認してくれた	5. 教員が何も言わなかった
6. 教員が緊張をほぐす雰囲気してくれた	6. 教員が励ましてくれた
7. 自分が集中している時に教員が助言をくれた	7. 教員が1回目はうまくいかないと言った
8. 教員が手をとって一緒にやってくれた	8. 集中している時に教員の助言があった
9. 教員が後押しをする言葉をかけてくれた	9. 刺すときに、教員が自分の手に触った
10. 教員にプレッシャーをかけられた	10. 教員に何も言われなくてじっと見られた
11. 教員が終始、真剣な表情をしていた	11. 患者役が友達だった
12. 教員が終始、笑顔を見せていた	12. 患者役が「痛い」と言った
	13. 患者役が不安そうだった
	14. 教員が終始真剣な表情をしていた
	15. 教員が、いざというとき真剣な表情をしていた
	16. 教員が終始笑顔を見せていた
	17. 教員が冷静に対応してくれた
	18. 教員にプレッシャーをかけられた

* 18の体験者は自由記述欄あり。

表14 対象者の属性と概要

n = 248

教育機関	人数	性別		平均年齢 ±標準偏差	准看護師	社会人	学位(修士)
		男性	女性		経験あり	経験あり	あり
大 学	69	6	63	20.28	0	2	1
短期大学	135	3	132	21.33	1	13	2
専門学校	44	2	42	21.70	0	7	7(含む, 1)
	248	11	237	21.09 ±3.75	1	22	10

(欠損3)

を1から6までの6件法で尋ねた。対象者の属性は質問Ⅳ、SOCは質問Ⅴで尋ねた。

「」は質問項目の重みづけを示す。記入に要する時間は30分程度であった。

分析には、統計ソフトSPSS19.0J for Windowsを用い、因子分析と重回帰分析を行った。

1) 主因子法、斜交回転による因子分析

自己制御のきっかけである質問Ⅰの14項目、行為の基準と実際の行為である質問Ⅱの23項目、緊張と不安の影響要因である質問Ⅲの18項目に対して、回答の得られなかった項目は

欠損値として扱い、それぞれ主因子法、斜交回転による因子分析を行った。因子分析の結果は、固有値の変化、スクリープロットの傾き、因子負荷量(以降、負荷量と記す)から因子の解釈可能性が担保されるかを考慮し、妥当な構成を検討した。 α 係数を算出して信頼性を確認し、最終的な構成を決定した。負荷量は.30以上、 α 係数は.60以上を最低の基準値として、この値に満たない質問項目、および因子は削除した。解釈の際の数値は、小数点第3位を四捨五入して、小数点第2位ま

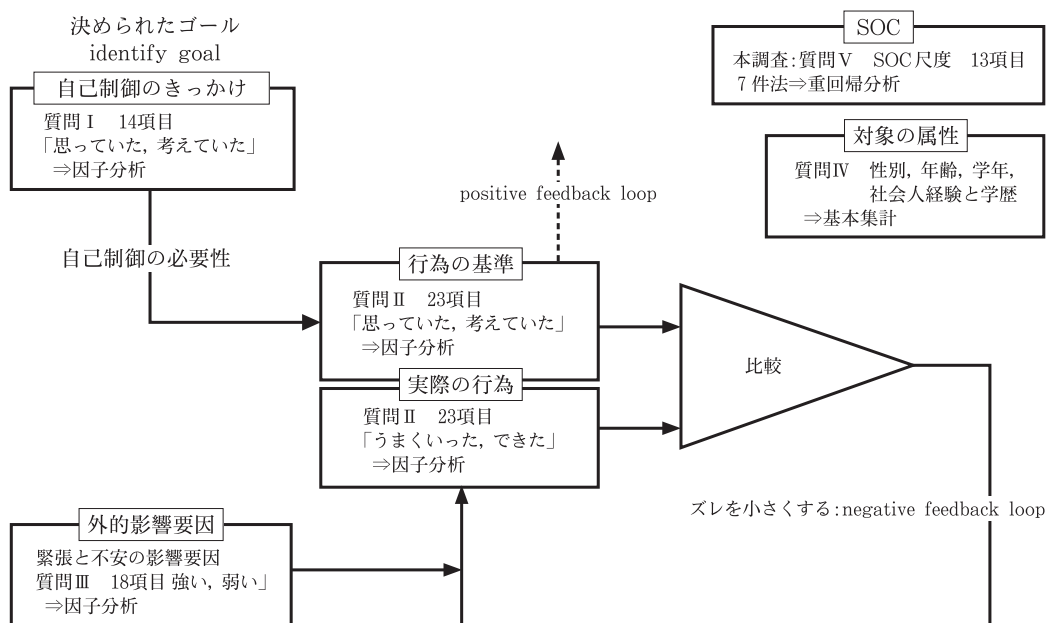


図6 質問紙の構成と分析方法

でとした。割合を示す%の数値は、小数点第1位を四捨五入して実数値に表記した。

2) 重回帰分析

自己制御とSOCは関連があると仮説を立て、SOC得点を従属変数に、質問IIの行為の基準と実際の行為の各因子の得点を独立変数にして、強制投入法で重回帰分析を行った。重回帰分析の結果より、質問紙の併存妥当性の検討を行った。有意水準は5%と設定した。SOC得点は、 α 係数を算出して信頼性を確認した。

4. 倫理的配慮

研究計画は、長野県看護大学倫理委員会の審査を経て承認を受けた(承認番号2012-03)。研究協力依頼書に、研究目的、研究協力の自由、回収方法、連絡先、個人情報の保護を明記して倫理的配慮を行い、研究協力書の返信をもって同意を得た。

VII. 結果

1. 自己制御のきっかけ

自己制御のきっかけの因子分析は、初回の分析では、項目14「友達だから緊張する」が、

いずれの因子にも.30以上の負荷量を示さなかった。項目8「失敗しても仕方がない」は.60以上の負荷量があったが、1項目のみでの因子の構成であった。項目14を削除して2回目の分析を行ったところ、項目8は再度1項目のみの構成であった。よって、項目8、14を削除し3回目の分析を行ったところ、3因子の累積が61%(表15)であった。スクリープロットの傾き(図7)からも、第IV因子以降はほぼ直線的に固有値の値が小さくなっていくことから、3因子の構成が妥当であり、解釈可能性も担保された。項目8、14を削除した12項目での α 係数は.80であった。自己制御のきっかけは、3因子の構成が妥当であると考えた。

2. 行為の基準

行為の基準の因子分析は、初回の分析では、項目6「血管に空気を入れないようにする」がいずれの因子にも.30以上の負荷量を示さなかった。よって、項目6を削除して2回目の分析を行ったところ、解釈可能性も担保された。 α 係数は.85であった。行為の基準は、5因子の構成が妥当であると考えた(表16)(図8)。

表15 きっかけの因子分析

	I	II	III	α 係数
第I因子 相手の苦痛に対する戸惑い				
4. 相手に痛い思いをさせる	.846	-.132	-.055	
6. 相手を不安にさせる	.827	.005	-.103	
7. 相手に気を遣わせる	.705	.004	-.037	
5. 失敗したら相手に迷惑になる	.535	.177	.176	
9. 相手に危害を与えるかもしれない	.347	.119	.316	.823
第II因子 相手の感情に沿う自己の内圧				
10. 相手を不安にさせてはいけない	-.066	.944	.000	
11. 相手を緊張させてはいけない	-.038	.863	-.069	
13. 相手が痛くないようにしましょう	.236	.326	-.072	.748
第III因子 針を刺すという未知のことへの恐怖と期待				
2. 針を刺すことが怖い	-.030	-.066	.863	
3. 針を刺すことに不安はない (R)	-.037	-.074	.579	
1. うまくできるか不安だ	.115	.096	.536	
12. 針を刺すことが楽しみだ (R)	-.098	-.048	.491	.674
全項目のCronbachの α 係数				.798
固有値	4.394	1.772	1.118	
累積寄与率 (%)	36.621	51.384	60.702	
因子相関数	I	II	III	
	I			
	II	.496		
	III	.620	.280	

*(R)は逆転項目を示す

(斜交回転による因子分析)

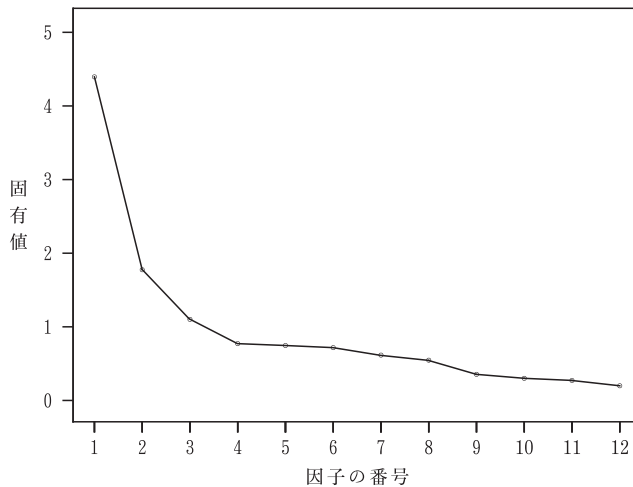


図7 表15の因子分析のスクリープロット

3. 実際の行為

実際の行為の因子分析は、初回の分析では、項目1「必要物品を忘れないように用意する」、項目7「固定をして針が抜けないようにする」がいずれの因子にも.30以上を示さなかった。また項目4「針を抜いた後はマッサージしないようにする」、項目15「針を抜いた後はその場

所をしっかりとさえる」は、負荷量は十分な値を示していたが、2項目のみの構成となった。固有値の変化は、第V因子で1.248、第VI因子で1.014であることと、スクリープロットの傾きが、第VI因子以降はほぼ直線的であることから、5因子に固定して2回目の分析を行った。この結果、解釈可能性が担保され、

表16 行為の基準の因子分析

	I	II	III	IV	V	α 係数
第I因子 ためらわず、成功するイメージで穿刺						
21. ためらわずに針を刺す	.904	-.065	-.127	-.082	-.005	
22. 怖いと思わないで行う	.751	-.143	.000	.084	-.038	
19. 落ち着いて冷静に行う	.723	.071	.119	-.104	-.058	
20. 成功するイメージで行う	.681	.008	.005	.108	.104	
18. 不安を見せないように行う	.680	.105	-.019	-.134	.049	.842
第II因子 針刺しなど事故の防止と止血						
15. 針を抜いた後はその場所をしっかりとさえる	-.149	1.035	.066	-.175	.005	
14. 針を抜いた後はマッサージしないようにする	.005	.694	-.102	.080	.004	
16. 針刺し事故をしないように片付ける	.078	.612	.061	-.062	-.008	
2. 滅菌操作に気を付けて物品を用意する	.086	.524	-.093	.237	-.016	
23. 患者役にちゃんと説明する	.248	.296	.119	.136	.098	.809
第III因子 血管損傷をさせない刺入の角度、長さ						
3. 角度に気を付けて血管に針を刺す	-.045	-.033	.959	-.190	-.010	
5. 針を進める時、長さに気をつける	-.009	-.130	.688	.181	.070	
4. 血管を外さないように刺す	.007	.156	.542	-.090	-.027	
7. 固定をして針が抜けないようにする	-.076	.064	.463	.366	.035	.770
第IV因子 駆血帯を外す順番を忘れないこと						
10. 手を楽にもらってから駆血帯を外す	-.050	-.053	-.079	.813	-.016	
9. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れない	-.090	-.060	-.030	.720	-.021	
1. 必要物品を忘れないように用意する	.005	.358	-.105	.490	-.042	
8. 駆血帯を巻いたら素早く針を刺す	.130	.042	.218	.371	-.018	
11. 後で慌てないように、物品の配慮をする	.094	.120	.226	.305	-.048	.772
第V因子 無駄な痛みを与えないこと						
12. 相手が痛いのは仕方がない (R)	-.078	.006	-.077	.019	.845	
13. 1回で採れなくてもよい (R)	.040	-.039	.058	-.048	.545	
17. とにかく血液が採れればよい (R)	.089	.034	.055	-.047	.442	.615
全項目のCronbachの α 係数						.852
固有値	7.030	2.032	1.733	1.366	1.181	
累積寄与率 (%)	31.955	41.192	49.068	55.276	60.643	
因子相関数						
	I	II	III	IV	V	
	II	.504				
	III	.477	.578			
	IV	.516	.651	.602		
	V	-.139	-.149	-.106	-.179	

*(R) は逆転項目を示す

(斜交回転による因子分析)

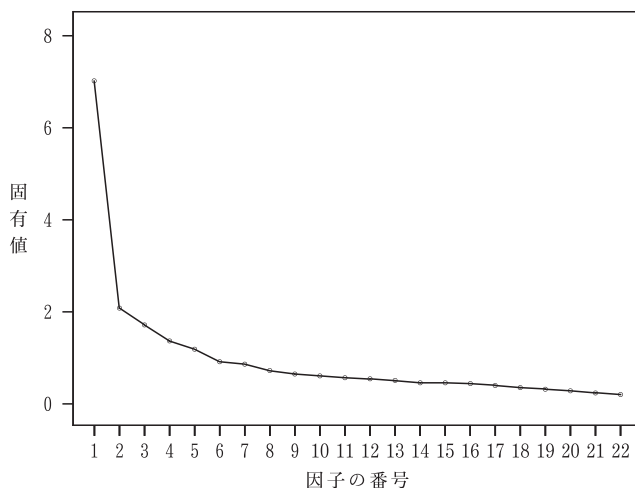


図8 表16の因子分析のスクリープロット

表17 実際の行為の因子分析

	I	II	III	IV	V	α 係数
第I因子 平常心で不安定を見せずに穿刺						
19. 落ち着いて冷静に行う	.847	.094	-.065	-.023	-.072	
22. 怖いと思わないで行う	.823	-.036	-.068	-.042	.105	
18. 不安を見せないように行う	.714	.050	.051	.048	-.098	
21. ためらわずに針を刺す	.713	-.076	.138	-.123	.129	
20. 成功するイメージで行う	.689	-.070	.131	.149	.031	.881
第II因子 出血などの危害を与えない為の手順						
10. 手を楽にもらってから駆血帯を外す	-.006	.688	-.064	-.069	.012	
9. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れない	-.088	.670	-.122	.083	-.075	
11. 後で慌てないように、物品の配置をする	.152	.513	.087	-.149	-.006	
8. 駆血帯を巻いたら素早く針を刺す	.124	.471	-.079	.140	.003	
1. 必要物品を忘れないように用意する	-.118	.464	.190	-.074	.169	
23. 患者役にちゃんと説明する	.074	.442	.070	-.006	.086	
2. 滅菌操作に気を付けて物品を用意する	-.141	.413	.289	-.129	.148	
7. 固定して針が抜けないようにする	.011	.332	.171	.186	.078	.774
第III因子 血管を外さない刺入の角度、長さ						
3. 角度に気を付けて血管に針を刺す	.063	-.020	.874	-.118	-.046	
5. 針を進める時、長さに気をつける	-.004	.118	.734	.085	-.143	
4. 血管を外さないように刺す	.099	-.105	.670	.138	-.011	
6. 血管に空気を入れないようにする	-.076	.294	.296	.100	.117	.805
第IV因子 1回で採血						
17. とにかく血液が採ればよい	.014	-.034	-.095	.796	.158	
13. 1回で採れなくてもよい	-.091	-.172	.226	.709	.068	
12. 相手が痛いのは仕方がない	.057	.288	-.045	.534	-.246	.722
第V因子 抜針時の止血						
14. 針を抜いた後はマッサージしないようにする	-.023	-.090	.031	.071	.806	
15. 針を抜いた後はその場所をしっかりとさえる	.045	.247	-.205	.062	.571	
16. 針刺し事故をしないように片付ける	.151	.141	-.083	-.025	.383	.625
全項目のCronbachの α 係数						.871
固有値	6.211	2.704	1.918	1.387	1.244	
累積寄与率(%)	27.003	38.762	47.099	53.129	58.539	
因子相関数	I	II	III	IV	V	
	II	.322				
	III	.367	.497			
	IV	.303	.322	.459		
	V	.035	.430	.366	.070	

(斜交回転による因子分析)

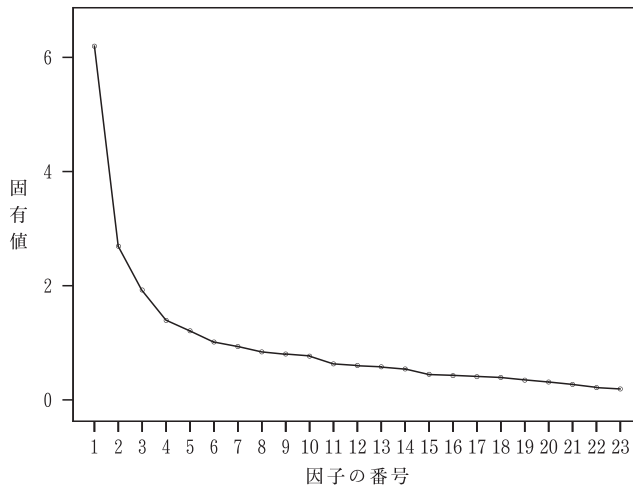


図9 表17の因子分析のスクリープロット

表18 緊張の影響要因の因子分析

	I	II	III	IV	α 係数
第I因子 適切なタイミングで冷静に助言					
3. 教員が助言をくれた	.868	-.013	.035	-.071	
2. 教員が最後まで側にいてくれた	.865	-.247	.163	.026	
4. 教員が血管を一緒に確認してくれた	.742	.141	-.051	.014	
17. 教員が冷静に対応してくれた	.668	.195	-.106	.043	.872
第II因子 集中を高めたい時の指導					
9. 刺すときに、教員が自分の手に触った	-.111	.782	.026	-.074	
8. 集中している時に教員の助言があった	.183	.563	.096	-.157	
15. 教員が、いざというとき真剣な表情をしていた	.013	.438	-.115	.209	
12. 患者役が「痛い」と言った	-.063	.405	.116	.169	
6. 教員が励ましてくれた	.359	.384	-.188	.039	
16. 教員が終始笑顔を見せていた	.147	.351	.055	.089	
18. 教員にプレッシャーをかけられた	.082	.311	.246	-.040	.705
第III因子 何も言わないうたずまい					
5. 教員が何も言わなかった	-.122	.202	.744	-.039	
10. 教員に何も言われないでじっと見られた	-.090	.119	.697	-.013	
1. 教員が見ているだけだった	.123	-.209	.614	.107	
7. 教員が1回目はうまくいかないと言った	.025	.337	.362	.067	
14. 教員が終始真剣な表情をしていた	.140	.207	.289	-.001	.756
第IV因子					
13. 患者役が不安そうだった	-.072	.082	.038	.767	
11. 患者役が友達だった	.220	-.072	.088	.369	.483 ⇒削除
全項目のCronbachの α 係数					.833
固有値	4.957	2.771	1.255	1.129	
累積寄与率(%)	27.538	42.934	49.907	56.180	
因子相関数					
	I	II	III	IV	
	II	.358			
	III	.020	.528		
	IV	.283	.306	.263	

(斜交回転による因子分析)

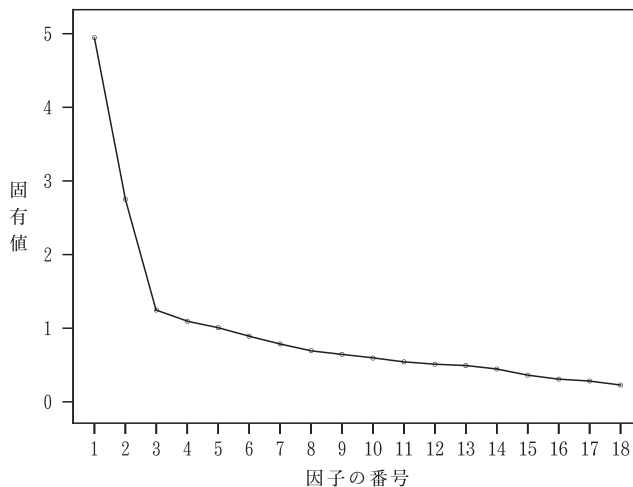


図10 表18の因子分析のスクリープロット

α 係数は .87であった。実際の行為は、5 因子の構成が妥当であると考えた(表17)(図9)。

4. 緊張の影響要因

自己制御の影響要因、緊張に影響する因子

分析は、初回の分析で4因子の構成が得られた。項目14「教員が終始真剣な表情をしていた」の負荷量は.29と基準値より.01の不足であったが、項目が削除された場合の α 係数が.83と

表19 不安の影響要因の因子分析

	I	II	III	IV	α 係数
第I因子 励ましと助言					
3. 教員が助言をくれた	.811	-.025	-.013	-.063	
4. 教員が血管と一緒に確認してくれた	.739	-.002	.003	-.011	
2. 教員が最後まで側についてくれた	.725	-.090	.097	.000	
6. 教員が励ましてくれた	.599	.125	-.035	.090	
17. 教員が冷静に対応してくれた	.565	.151	-.032	.084	.820
第II因子 刺入時の指導					
9. 刺すときに、教員が自分の手に触った	-.059	.837	-.134	-.116	
8. 集中している時に教員の助言があった	.305	.589	.028	-.120	
12. 患者役が「痛い」と言った	-.072	.512	-.061	.221	
15. 教員が、いざというとき真剣な表情をしていた	.007	.400	-.103	.233	
18. 教員にプレッシャーをかけられた	.065	.398	.101	-.021	
14. 教員が終始真剣な表情をしていた	.098	.298	.207	.042	.673
第III因子 見ているだけのたたずまい					
1. 教員が見ているだけだった	.133	-.215	.714	.066	
5. 教員が何も言わなかった	-.068	.252	.685	-.049	
10. 教員に何も言われないでじっと見られた	-.161	.218	.637	-.034	
7. 教員が1回目はうまくいかないと言った	-.020	.329	.353	.100	.792
第IV因子					
13. 患者役が不安そうだった	-.026	.106	.014	.704	
11. 患者役が友達だった	.224	-.147	.122	.354	.460 ⇒削除
全項目のCronbachの α 係数					.809
固有値	4.204	3.063	1.211	1.123	
累積寄与率(%)	24.727	42.742	49.864	56.468	
因子相関数					
	I	II	III	IV	
	II	.088			
	III	-.036	.662		
	IV	.188	.273	.243	

(斜交回転による因子分析)

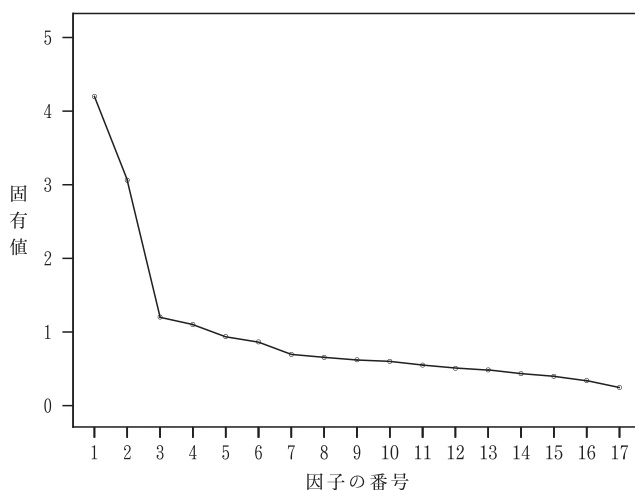


図11 表19の因子分析のスクリープロット

全項目の α 係数と同じ値であったことから削除とはしなかった。4因子の構成で α 係数を算出したところ、項目11, 13で構成される第IV因子の α 係数は.48と基準値に満たなかった。

スクリープロットの傾きの角度からは、3因子の構成、もしくは4因子の構成が妥当であると考えられたことも踏まえて、緊張の影響要因は3因子の構成とした。(表18)(図10)。

5. 不安の影響要因

自己制御の影響要因、不安に影響する因子分析は、初回の分析で4因子の構成が得られたが、項目16はいずれの因子にも.30以上の負荷量を示さなかった。項目が削除された場合の α 係数は.83と高い値であったため、項目16を削除し2回目の分析を行ったところ4因子の構成が得られた。4因子の構成で α 係数を算出したところ、項目11, 13で構成される第IV因子の α 係数は.46と基準値に満たなかった。スクリープロットの傾きの角度からは、3因子の構成、もしくは4因子の構成が妥当であると考えられたことも踏まえて、不安の影響要因は3因子の構成とした。(表19)(図11)。項目11, 13の削除は、緊張の影響要因と同じ結果であった。

6. 質問紙の併存妥当性

学生相互間採血の学生の自己制御に関する質問紙の妥当性を、SOC尺度を用いて併存妥当性の検討を行った。学生のSOC得点(最低13点～最高91点)の分析に有効な235ケー

スに対して、ネガティブ・フィードバック・ループが機能していると考えられる質問Ⅱについて、重回帰分析を行った。質問Ⅱの行為の基準、実際の行為それぞれの欠損値を除いたケースを対象とした。行為の基準は225ケース、有効回答率91%、実際の行為は209ケース、有効回答率85%を分析の対象とした。

分析の結果、行為の基準の第I因子【ためらわず、成功するイメージで穿刺】($\beta = .21, p = .008, p < .01$)と、実際の行為の第I因子【平常心で不安を見せずに穿刺】($\beta = .20, p = .011, p < .01$)で有意であった。自己制御の行為の基準の因子【ためらわず、成功するイメージで穿刺】と、実際の行為の因子【平常心で不安を見せずに穿刺】は、SOCに有意な影響を及ぼしており、研究者の作成した自己制御に関する質問紙の併存妥当性を確認できた(表20, 表21)。

SOC尺度の平均値は、49.94 (± 9.45)、先行研究に近い値であった。 α 係数は.73が得られ信頼性を確保できた。

表20 行為の基準とSOCとの重回帰分析

	標準化係数 (β)	有意確率
ためらわず、成功するイメージで穿刺	.206	**
針刺しなど事故の防止と止血	-.068	n.s.
血管損傷をさせない刺入の角度、長さ	.056	n.s.
駆血帯を外す順番を忘れないこと	-.059	n.s.
無駄な痛みを与えないこと	.075	n.s.

(重回帰分析：強制投入法，調整済 $R^2 = .041$)

**: $p < .01$, n.s.:not significant

表21 実際の行為とSOCの重回帰分析

	標準化係数 (β)	有意確率
平常心で不安を見せずに穿刺	.195	*
出血などの危害を与えない為の手順	.113	n.s.
血管を外さない刺入の角度、長さ	-.008	n.s.
1回で採血	-.064	n.s.
抜針時の止血をする	-.132	n.s.

(重回帰分析：強制投入法，調整済 $R^2 = .058$)

*: $p < .05$, n.s.:not significant

V. 考 察

本研究で用いた研究者の作成した質問紙は、SOC尺度との併存妥当性が確認できた。以下、自己制御の要素ごとに質問項目の妥当性について考察する。

1. 自己制御のきっかけ

自己制御のきっかけの第Ⅰ因子は5項目で構成されており、相手に苦痛を与えることを考える項目が高い負荷量を示し、 α 係数は.82であった。針を刺すことで相手に痛みを与えてしまうこと、相手は針を刺されることに不安があること、また、この不安である感情を見せてしまうと相手に気を遣わせることになる、など相手の感情を考えることで戸惑いが生じていることを表す項目で構成された。因子名を【相手の苦痛に対する戸惑い】と命名した。

第Ⅱ因子は3項目で構成されており、相手にはいけないことを考える項目が高い負荷量を示し、 α 係数は.75であった。相手の感じる不安、緊張が刺入時の痛みを増強させてしまうため、相手に負の感情を抱かせてはいけないというプレッシャーが生じることを示す項目で構成された。因子名を【相手の感情に沿う自己の内圧】と命名した。

第Ⅲ因子は4項目で構成されており、針を刺す恐怖が高い負荷量を示し、 α 係数は.67であった。人体に針を刺すという未知の行為に対して、恐怖とともに楽しみであるという感情も生じていることを示す項目で構成された。因子名を【針を刺すという未知のことへの恐怖と期待】と命名した。

自己制御のきっかけは、【相手の苦痛に対する戸惑い】【相手の感情に沿う自己の内圧】【針を刺すという未知のことへの恐怖と期待】の3因子が抽出された。各因子の項目の負荷量は.30以上を示す項目で構成されており、因子の α 係数も.60以上を示し信頼できるものであった。自己制御のきっかけの質問項目は、

「友達だから緊張する」「失敗しても仕方がない」の2項目を削除した12項目が妥当であると考えた。

2. 行為の基準

行為の基準の第Ⅰ因子は5項目で構成されており、いずれの項目も.60以上の負荷量を示していた。5項目とも、怖いと感じる自分の感情を表出しないようにコントロールする内容で構成されていた。 α 係数は.84であり、因子名を【ためらわず、成功するイメージで穿刺】と命名した。

第Ⅱ因子は5項目で構成されており、負荷量の高い項目はいずれも抜針時の留意事項であった。 α 係数は.81であり、因子名を【針刺しなど事故の防止と止血】と命名した。

第Ⅲ因子は4項目で構成されており、刺入の場面に限定された項目であった。針を刺入する角度、長さが高い負荷量を示し、 α 係数は.77であった。因子名を【血管損傷をさせない刺入の角度、長さ】と命名した。

第Ⅳ因子は5項目で構成されており、駆血帯を外す順番に関するものが高い負荷量を示し、 α 係数は.62であった。因子名を【駆血帯を外す順番を忘れないこと】と命名した。

第Ⅴ因子は3項目で構成されており、これらはすべて逆転項目であった。 α 係数は.85であり、因子名を【無駄な痛みを与えないこと】と命名した。

行為の基準は、【ためらわず、成功するイメージで穿刺】【針刺しなど事故の防止と止血】【血管損傷をさせない刺入の角度、長さ】【駆血帯を外す順番を忘れない】【無駄な痛みを与えない】の5因子が抽出された。各因子の項目の負荷量は.30以上を示す項目で構成されており、因子の α 係数も.60以上を示し信頼できるものであった。行為の基準の質問項目は、「血管に空気を入れないようにする」を削除した22項目が妥当であると考えた。

3. 実際の行為

実際の行為の第Ⅰ因子は、行為の基準と同

じ項目で構成された。5項目それぞれの負荷量は行為の基準とは異なり、落ち着くこと、怖いと思わないという平常心を保つことが高い負荷量を示し、 α 係数は.88であった。因子名を【平常心で不安を見せずに穿刺】と命名した。

第Ⅱ因子は8項目で構成されており、駆血帯を外す順番に関するものが高い負荷量を示し、 α 係数は.77であった。駆血帯への意識は、相手に危害を与えてはいけないことから生じているため、因子名を【出血などの危害を与えない為の手順】と命名した。

第Ⅲ因子は4項目で構成されており、刺入の場面に限定された項目が高い負荷量を示していた。項目6の負荷量は.29と基準値に満たなかったが.01の不足であったこと、項目が削除された場合の α 係数が.86と全23項目の α 係数以上を示さなかったことから削除とはしなかった。 α 係数は.81であった。因子名を【血管を外さない刺入の角度、長さ】と命名した。

第Ⅳ因子は3項目で構成されており、血液を採ることが高い負荷量を示し、 α 係数は.72であった。因子名を【1回で採血】と命名した。

第Ⅴ因子は、抜針直後の留意事項で構成され、 α 係数は.63であり、因子名を【抜針時の止血】と命名した。

実際の行為は、【平常心で不安を見せずに穿刺】【出血などの危害を与えない為の手順】【血管を外さない刺入の角度、長さ】【1回で採血】【抜針時の止血】の5因子が抽出された。各因子の項目の負荷量は.30以上を示す項目で構成されており、各因子の α 係数も.60以上を示し信頼できるものであった。実際の行為の質問項目は、行為の基準との整合を踏まえないければ、23項目すべてが妥当であると考えられる。しかし、行為の基準と同じ質問項目を設定する必要があるため、「血管に空気を入れないようにする」は、負荷量が低いため削除することがより妥当であると考えた。よって、行為の基準と実際の行為の質問項目は22

項目とした。

4. 緊張の影響要因

緊張の影響要因の第Ⅰ因子は4項目で構成されており、教員が近くにいることの学習支援が高い負荷量を示し、 α 係数は.87であった。因子名を【適切なタイミングで冷静に助言】と命名した。

第Ⅱ因子は7項目で構成されており、学生が最も緊張すると考えられる刺入の場面での影響が高い負荷量を示し、 α 係数は.71であった。因子名を【集中を高めたい時の指導】と命名した。

第Ⅲ因子は5項目で構成されており、教員が何も言わないことが高い負荷量を示し、 α 係数は.76であった。因子名を【何も言わないたたずまい】と命名した。

緊張に影響する因子は、教員が【適切なタイミングで冷静に助言】、教員の【集中を高めたい時の指導】、教員が【何も言わないたたずまい】の3因子が抽出された。各因子の項目の負荷量は.30以上を示す項目で構成されており、各因子の α 係数も.60以上を示し信頼できるものであった。削除された第Ⅳ因子の項目は、「患者役が不安そうだった」「患者役が友達だった」であり、患者役である相手の反応は外的影響要因とはならないことがわかった。緊張の影響要因の質問項目は、相手の反応に関する項目を除いた16項目とした。

5. 不安の影響要因

不安の影響要因の第Ⅰ因子は5項目で構成されており、教員が近くにいるという学習支援が高い負荷量を示し、 α 係数は.82であった。因子名を【励ましと助言】と命名した。

第Ⅱ因子は6項目で構成されており、項目9「刺すときに、教員が自分の手に触った」が高い負荷量を示し、 α 係数は.67であった。因子名を【刺入時の指導】と命名した。

第Ⅲ因子は4項目で構成されており、見てだけの学習支援が高い負荷量を示し、 α

係数は.79であった。因子名を【見ているだけのたたずまい】と命名した。

不安に影響する因子は、教員の【励ましと助言】、教員の【刺入時の指導】、教員が【見ているだけのたたずまい】の3因子が抽出された。各因子の項目の負荷量は.30以上を示す項目で構成されており、各因子の α 係数も.60以上を示し信頼できるものであった。削除された第IV因子の項目は、「患者役が不安そうだった」「患者役が友達だった」であり、緊張の影響要因と同じく、患者役である相手の反応は外的影響要因とはならないことがわかった。不安の影響要因の質問項目は、「教員が終始笑顔を見せていた」と、相手の反応に関する項目を除いた15項目が妥当であるが、緊張の影響要因と同じ質問項目を設定することを踏まえると、「教員が終始笑顔を見せていた」は、削除しない方がより妥当であると考へた。よって、緊張の影響要因と不安の影響要因の質問項目は16項目とした。

以上、質問紙は、因子分析の結果から妥当性が得られたため、学生相互間採血の学生の自己制御を測定できたと考へる。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、A県内およびA県に隣接する看護師養成の教育機関の7機関、247人の看護学生の学生相互間採血の場面に限定した結果である。調査対象である看護学生は、複数の教育課程と複数の学年である。学習内容や学習方法は各教育機関によって若干の差異があり、学年が異なることによる差異もある。今回の質問紙は、この差異をとり除ける内容にはなっていないこと、ある限られた範囲であることを研究の限界とする。今後は、自己制御の尺度開発にむけて、再検査を実施する必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、アンケート調査に

快くご協力いただいた7校の教育機関の先生方、そして学生のみなさんに深く御礼申し上げます。

本研究は、長野県看護大学大学院看護学研究科の修士論文の一部に加筆・修正を加え執筆いたしました。

文 献

- 1) 厚生労働省：「卒業時の到達度」. 2008.
< <http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/seisaku/pdf/2008/20080208.pdf>.> (30 July. 2011).
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書. March. 2003.
< <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>.> (30 July. 2011).
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育のあり方に関する懇談会・論点整理「第三章 看護基礎教育の充実の方向性について」. 2008.
< <http://www.nurse.or.jp/home/kisokyouiku/pdf/ronten.pdf>.> (30 July. 2011).
- 4) 成田 円, 神野朋美, 畑瀬智恵美ほか：採血技術演習の実際と今後の課題－静脈血採血の技術演習を困難にしている要因の検討－. 日本看護学会論文集, 看護教育, 35, 15-17, 2005.
- 5) 高橋 亮, 有田清子, 蔵谷範子ほか：「静脈血採血」演習における学生・教員間の評価の比較. 川崎市立看護短期大学紀要, 12(1), 9-15, 2007.
- 6) 井野恭子, 鈴木真由美, 伊藤洋子：「静脈血採血」技術の修得を促す教育方法. 飯田女子短期大学紀要, 25, 85-96, 2008.
- 7) Carver C. S, Scheier M. F : *Attention and Self-Regulation-A control theory approach to human behavior*, Springer-Verlag, New York, 1981, pp.19-30.

- pp.223-242.
- 8) 池田菜々子, 門間正子, 佐藤千紘ほか：採血演習における看護学生の不安に関する調査. 日本看護学会論文集, 看護教育 39, 208-210, 2008.
 - 9) 杉山敏子, 渡邊生恵：看護学生が初めて注射針を刺入する際の生理心理指標の変化. 東北大学医療技術短期大学部紀要, 11 (2), 221-228, 2002.
 - 10) 土井英子, 杉本幸枝, 三宅真由美ほか：学生同士で行う採血演習の効果と課題－注射法の看護技術修得に実技試験を取り入れて－. 新見公立短期大学紀要, 28, 101-106. 2007.
 - 11) 南 妙子, 岩本真紀, 粟納由記子ほか：静脈血採血演習時における看護学生の学びの分析. 香川大学看護学雑誌, 12 (1), 37-46, 2008.
 - 12) 荒川千秋, 佐藤亜月子, 神原裕子：学生が他の学生を対象に相互に採血をするトレーニングでの学び. 日本看護学教育学会誌, 21 (1), 51-57, 2011.
 - 13) 柏木恵子：幼児期における「自己」の発達－行動の自己制御機能を中心に－, 第1章 会的場面における自己行動制御機能, 第5章 行動制御機能へのもう一つのアプローチ, 東京大学出版会, 東京, 1992, pp.17-43. pp.11-154.
 - 14) Carver C.S, Scheier M.F：Origins and Functions of Positive and Negative Affect. *Psychological Review*, 97 (1), 19-35, 1990.
 - 15) Antonovsky, Aaron： *Unraveling the mystery of health：How people manage stress and stay well*, Jossey-Bass, San Francisco, 1987. 山崎喜比古, 吉井清子 (翻訳) 健康の謎を解く－ストレス対処と健康保持のメカニズム, 有信堂, 東京, 2001.
 - 16) Antonovsky, Aaron.： *Health, stress, and coping*, New Perspective on Mental and Physical Well-being, San Francisco, 1967, pp.182-197.
 - 17) 山崎喜比古：健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC. *Quality Nursing*, 5 (10), 81-88, 1999.
 - 18) 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 坂野純子：ストレス対処能力SOC, 有信堂, 東京, 2008.
 - 19) Antonovsky Aaron：The Salutogenic model as a theory to guide health promotion. *Health Promotion International*, 11 (1), 11-18, 1996.
 - 20) 本江朝美, 高橋ゆかり, 桑田恵子ほか：看護学生の不安に対する認知的評価と Sense of Coherence との関連. 上武大学看護学部紀要, 5 (1), 2-11, 2009.
 - 21) 本江朝美, 高橋ゆかり, 古市清美ほか：看護学生の sense of coherence (SOC) と自己および他者に対する意識の関係. 上武大学看護学部紀要, 6 (2), 1-7, 2011.
 - 22) 前掲 5)：「静脈血採血」演習における学生・教員間の評価の比較.
 - 23) 吾妻知美, 小林千代：看護技術演習「注射」における体験学習に関する検討－採血, 皮下注射, 筋肉内注射および皮内注射の演習後の学びの分析－. 天使大学紀要, 6, 11-19, 2006.
 - 24) 本間昭子, 倉井佳子, 荒井淑子：学生相互間採血の意義と学生の不安軽減. 日本看護学会論文集, 看護教育, 37, 33-35, 2007.
 - 25) 土屋香代子, 三國和美, 竹本由香里ほか：「静脈血採血」演習時の学生の不安に関する研究. 宮城大学看護学部紀要, 9 (1), 21-33, 2006.
 - 26) 杉本吉美, 後藤 淳, 青野亜希子ほか：卒業直前に行う学生主体の採血演習の効果. 日本看護学会論文集, 看護教育, 38, 299-301, 2008.

- 27) 前掲 10) : 学生同士で行う採血演習の効果と課題。ー注射法の看護技術修得に実技試験を取り入れて。
28) 前掲 11) : 静脈血採血演習時における看護学生の学びの分析。
29) 前掲 12) : 学生が他の学生を対象に相互に採血をするトレーニングでの学び。
30) 畑瀬智恵美, 澁谷香代 : 学生同士による採血の体験学習からの学びー患者役と看護師役を通してー。日本看護学会論文集, 看護教育, 39, 436-438, 2008.

資料

学生のみなさんへ

アンケート調査への協力をお願い

看護学生のみなさんこんにちは。私は、長野県看護大学大学院で基礎看護学を学んでおります鈴木真由美と申します。現在、「学生相互間採血における看護学生の自己制御（self-regulation）の明確化」というテーマの研究に取り組んでおります。

今回の研究の目的は、学生同士で行う採血の場面で、みなさんがどのような感情と向き合い、どのように行動したのかを明確にすることです。みなさんが協力してくださることで、私たち教員は、より効果的な学習支援ができると考えています。

ご協力いただきたい内容は、アンケートへの回答です。回答の記入には、30分程度かかります。研究にご協力くださるかどうかはご自由で、ご協力くださらなくても学業や成績には一切影響しませんし、不利益が生じることはありません。回答し、採血場面を思い出すことで不快な思いをする可能性があります。回答したくない質問には答えなくても構いません。回答が終わりましたら、添付の封筒に入れて郵便ポストに投函してください。2週間を目安に投函してください。ご協力いただくことで、学校名や個人が特定されることはありません。論文としてまとめた後は、アンケートはシュレッダーにかけて処分いたします。

なお、あなたが未成年の場合は、この依頼状とアンケート用紙を保護者に見せて同意を得てからご協力ください。

本研究は長野県看護大学倫理委員会の承認を得ております（承認番号#2012-03）。本研究は、長野県看護大学修士学位論文として提出予定です。研究結果は学内の修士論文発表会や学会などで発表させていただきます。

みなさん、お忙しいとは思いますが、研究の主旨を理解していただき、ぜひご協力ください。同意されない場合は、お手数ですが、アンケートは破棄してください。より良い指導を目指しておりますので、みなさんの率直なお気持ちをお聞かせください。

ご質問等ございましたら、お手数ですが次の連絡先までお願いいたします。

研究者	長野県看護大学大学院博士前期課程 看護基礎学領域基礎看護学専攻 鈴木真由美
連絡先	電子メール ○○@××.ac.jp 電話 0265-○○-×××× (飯田女子短期大学看護学科 研究室直通)
指導教員	×××

*以降、ねぎらいの言葉など、一部省略あり

資料

学生相互間採血における看護師役の場面に関するアンケート

学生同士で行う採血の演習について思い出し、あなたの感じたままを回答してください。

質問Ⅰ～質問Ⅴについて、あまり悩まずに、自分がその時どのような気持ちであったか、どのように感じたかをお答えください。なお、質問のなかの「相手」とは、患者役の学生のことを指します。

質問Ⅰ

看護師役の場面について、いよいよあなたが実施するとなったときの気持ち、思っていたこと、考えていたことについて、例)を参考にして、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	強					弱
		← 思っていた 考えていた →				
例) 1. 夏は暑い	⑥	5	4	3	2	1
1. うまくできるか不安だ	6	5	4	3	2	1
2. 針を刺すことが怖い	6	5	4	3	2	1
3. 針を刺すことに不安はない	6	5	4	3	2	1
4. 相手に痛い思いをさせる	6	5	4	3	2	1
5. 失敗したら相手に迷惑になる	6	5	4	3	2	1
6. 相手を不安にさせる	6	5	4	3	2	1
7. 相手に気を遣わせる	6	5	4	3	2	1
8. 失敗しても仕方がない	6	5	4	3	2	1
9. 相手に危害を与えるかもしれない	6	5	4	3	2	1
10. 相手を不安にさせてはいけない	6	5	4	3	2	1
11. 相手を緊張させてはいけない	6	5	4	3	2	1
12. 針を刺すことが楽しみだ	6	5	4	3	2	1
13. 相手が痛くないようにしよう	6	5	4	3	2	1
14. 友達だから緊張する	6	5	4	3	2	1

資料

質問Ⅱ

看護師役の場面について、あなたの行為、行動であてはまる番号一つに○を付けてください。ひとつの質問に対して、「思っていた」あるいは「考えていた」を問う欄と、「うまくいった」あるいは「うまくできた」を問う欄があります。それぞれに回答してください。

	← 強					← 弱					← 強					← 弱								
	思っていた 考えていた					うまうま うまうま					うまうま うまうま													
例1) 手洗いをしっかり行う	6	5	④	3	2	1	⑥	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
1. 必要物品を忘れないように用意する	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
2. 滅菌操作に気を付けて物品を用意する	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
3. 角度に気を付けて血管に針を刺す	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
4. 血管を外さないように刺す	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
5. 針を進める時、長さに気をつける	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
6. 血管に空気を入れないようにする	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
7. 固定をして針が抜けないようにする	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
8. 駆血帯を巻いたら素早く針を刺す	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
9. 針を抜く前に駆血帯を外すことを忘れない	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
10. 手を楽にしてもらってから駆血帯を外す	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
11. 後で慌てないように、物品の配置をする	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
12. 相手が痛いのは仕方がない	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
13. 1回で採れなくてもよい	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
14. 針を抜いた後はマッサージしないようにする	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
15. 針を抜いた後はその場所をしっかりとさえる	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
16. 針刺し事故をしないように片付ける	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
17. とにかく血液が採ればよい	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
18. 不安を見せないように行う	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
19. 落ち着いて冷静に行う	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
20. 成功するイメージで行う	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
21. ためらわずに針を刺す	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
22. 怖いと思わないで行う	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
23. 患者役にちゃんと説明する	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1

資料

質問Ⅲ

あなたの看護師役の場面について、あなたの緊張、不安に影響したものに関して、例1)例2)を参考にして、あてはまる番号一つに○を付けてください。ひとつの質問に対して、「緊張」と「不安」を問う欄があります。それぞれに回答してください。「体験なし」の場合は、例2)のように○をつけてください。

	体験なし	強					弱	強					弱
		← 緊張 →						← 不安 →					
例1) みんなが笑顔で迎えてくれた	0	6	⑤	4	3	2	1	⑥	5	4	3	2	1
例2) 誰かが怖い顔をしていた	①	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
1. 教員が見ているだけだった	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
2. 教員が最後まで側についてくれた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
3. 教員が助言をくれた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
4. 教員が血管を一緒に確認してくれた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
5. 教員が何も言わなかった	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
6. 教員が励ましてくれた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
7. 教員が1回目はうまくいかないと言った	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
8. 集中している時に教員の助言があった	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
9. 刺すときに、教員が自分の手に触った	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
10. 教員に何も言われなくてじっと見られた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
11. 患者役が友達だった	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
12. 患者役が「痛い」と言った	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
13. 患者役が不安そうだった	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
14. 教員が終始真剣な表情をしていた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
15. 教員が、いざというとき真剣な表情をしていた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
16. 教員が終始笑顔を見せていた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
17. 教員が冷静に対応してくれた	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
18. 教員にプレッシャーをかけられた *体験した方は下記の質問に回答してください。	0	6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
*18. の項目を体験した方にお聞きします。教員のどのような関わりがプレッシャーとなりましたか。この欄に記入してください。													

資料

質問Ⅳ

以下の質問について該当する項目の□にレを、あるいは()内に数字、言葉を記入してください。

- (1) 初めての採血の自信について、最も該当する項目一つにレを、該当する項目がない場合は()内に言葉を記入してください。

自信があった どちらかという自信があった

自信はなかったが自信をもとうとした 自信は全くなかった

その他()

- (2) 初めての採血の後の気持ちについて、最も該当する項目一つにレを、該当する項目がない場合は()内に言葉を記入してください。

うれしくなった 憂うつになった 安心した 不安になった

その他()

- (3) 緊張と不安について、強く感じたのはどちらですか。コントロールしようと思ったのはどちらですか。それぞれ、該当する項目一つにレをつけてください。

強く感じたのは、(緊張 不安)であった。

コントロールしようと思ったのは、(緊張 不安)であった。

- (4) あなたの年齢をお聞かせください。()歳

- (5) あなたの学年をお聞かせください。()学年

- (6) あなたの性別をお聞かせください。 男性 女性

- (7) あなたは准看護師の経験がありますか。

なし

ある ⇒臨床経験年数をお聞かせください。()年の臨床経験がある。

- (8) あなたは准看護師以外の、社会人経験がありますか。

なし

ある ⇒職業をお聞かせください。()の社会人経験がある。

- (9) あなたは4年制大学を卒業していますか。

いいえ

はい ⇒学位をお聞かせください。

(学士：)

(修士：)

資料

質問Ⅴ あなた自身についてお伺いします。

次の質問について、あなたに完全に当てはまるならば、1に○を付けてください。7の下に書いてあることがあなたに完全に当てはまるのならば7に○を付けてください。1でも7でもないように感じるならば、あなたの気持ちを最もよく表す番号一つに○をつけてください。

- | | | | | | | | |
|-----------------------------------------------------------------------------|---|---|---|---|---|---|-----------------|
| 1. あなたは、自分のまわりで起きていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 全くない | | | | | | | とてもよくある |
| 2. あなたは、これまでによく知っていると思っていた人の、思わぬ行動に驚かされたことがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 全くなかった | | | | | | | いつもそうだった |
| 3. あなたは、あてにしていた人ががっかりさせられたことがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 全くなかった | | | | | | | いつもそうだった |
| 4. 今まで、あなたの人生は、 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 明確な目標や目的は全くなかった | | | | | | | とても明確な目的や目標があった |
| 5. あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |
| 6. あなたは、不慣れた状況の中にいると感じ、どうすればよいかわからないと感じることはありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |
| 7. あなたが、毎日していることは、 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 喜びと満足を与えてくれる | | | | | | | 辛くたいくつである |
| 8. あなたは、気持ちや考えが混乱することがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |
| 9. あなたは、本当なら感じたくないような感情を抱いてしまうことがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |
| 10. どんな強い人でさえ、時には「自分はダメな人間だ」と感じることもあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| まったくなかった | | | | | | | よくあった |
| 11. 何かが起きた時、ふつう、あなたは、 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| そのことを過大に評価したり、過小に評価したりしてきた | | | | | | | 適切な見方をしてきた |
| 12. あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |
| 13. あなたは、自制心を保つ自信がなくなることがありますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| とてもよくある | | | | | | | まったくない |